

# GUNDAM MS HISTORICA

OFFICIAL FILE MAGAZINE

宇宙世紀  
ガンダム列伝

Vol.

2

¥690

ガンダム  
MSヒストリカ

伝説のラストシューティングから  
次世代機誕生へ！

ガンダム直系機特集

## Gを継ぐもの

RX-78-2 ガンダム RX-178 ガンダム Mk-II  
RX-79[G] 陸戦型ガンダム RX-79[G]Ez-8 ガンダム Ez8

ガンダムの世紀 皆河有伽

第2回 最強の機体を求めて

GUNDAM SIDESTREAM ガンダム・サイドストリーム

第2回 SDガンダム・発展編

GUNPLA Revelations ~ガンプラ30年の歩み~

第2回 MIGの登場から始まった第2次ガンブラブゲーム

# 伝説への道

## 機動戦士ガンダム EVIL DAM

幾多の機動戦士が戦った一年戦争の戦場を駆け抜ける。ニュータイプ能力を秘めた少年が、巨大な機体は、ジオン公国軍の開発した。この機体と、少年の活躍し、終焉を迎えようとする一年戦争の戦場を駆け抜ける。

MAN-08



進化の果てに

# 最強MSの完成

ガンダムを最強たらしめたニュータイプ・パイロット だがその真価を発揮するには、最後の改造が必要だった。

構成・文 日下部匡俊

## マグネット・コーティングとニュータイプ・パイロット



マグネット・コーティングの効果を最大限に引き出す反応速度は、向上した。



結局、向かう大戦末期、ふたたび宇宙へと出たガンダムは、当初想定された以上の完成度をもった機体となっていた。

単純なスペックだけならば、すでにシオン公国軍の新鋭機の方が上回っており、MSのビーム兵器の標的も、般化しつつあった当時、もはやRXシリーズの優位性は失われたと、とてもよかったのだが、それでもRX-78-2ガンダムは、無敵と、いついかなる状況でも勝つことを目指していた。

その最大の理由は、パイロットであるアムロ・レイが、ニュータイプ、宇宙空間に適合し、より拡大された認識能力と洞察力を獲得した新人兵と、なっていた。たったこれとあるとされている。

だが、果たしてそれだけだろうか？ シオン軍が投入したニュータイプ専用機のように、ニュータイプの能力をそのまま機体コントロールに用いているものとは異なり、ガンダムはあくまで単なる高性能なMSにすぎない。

アムロ・レイの機體を受け入れて情報処理を行い、機體を制御していたのは、RXシリーズに搭載された教育型コンピュータ・システムだった。過去数ヶ月にわたる機體データの蓄積によって、システムがアムロの動作から意図を察知し、細部の機體コントロールを補正し、ニュータイプ

の瞬間的な反応をほぼ完璧に再現することに成功していたのである。

だが、駆動系はそうはいかなかった。18メートルの巨大な機體をアムロの反応速度そのままに稼働させることは、最新技術のフィード・バックをもつてしても困難だった。

駆動系の反応速度に問題があるとわかった。急遽、まだ実験段階にあったマグネット・コーティング技術が投入された。これは、モノホールを1とする磁気成分を利用して、駆動部の機械的干渉をほぼゼロにすることで、反応性の向上とハワートン効果の効率化を図るといったものだ。

## 一年戦争を終結させた究極の機体

マグネット・コーティングの開発者であるモスク・ハン博士も、この技術の投入でどれほどの効果かとはかるが機能的であったという。

だが、駆動部のボルトネックを取り扱われたガンダムは、想像を絶するポテンシャルを発揮した。直接思考でコントロールするシステムではないものの、パイロットの思考をある程度トレース可能なまでに成長した教育型コンピュータとあいまって、ガンダムはニュータイプであるアムロ・レイの思考と操作に、1分留まることができるだけの反応速度を獲得した。

このような進歩を経たガンダムは、一年戦争時において、MSの頂点の座についていた。元々、このガンダムに対して、シオン軍はなりふりかま

わず。秘密兵器とも、あるいはニュータイプ・パイロットの搭乗した新型MAを投入している。特にMAN-08エルメスは、ミノフスキー粒子の影響下でも遠隔コントロールが可能な小型機動砲台、ヒットを1兵装とするニュータイプ専用の強力なMAで、大戦参加初日に4隻のサラミス級を撃沈したほどの機体だった。しかしガンダムは、エルメスと違って、この場合、自衛攻撃を繰り返す。これを防いでいる。

## RX-78-2 GUNDAM SPEC

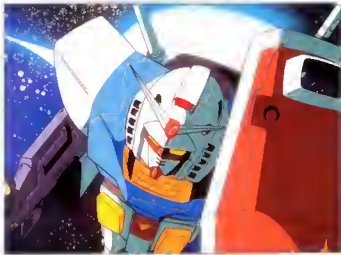
全高	18.0m
本体質量	43.4t
全備質量	60.0t
出力	出力 300kW
推進力	推力 15,000kg
機動性	機動性 15,000km
装甲材質	リチウム合金
武装	ガンダム・マイン、ガンダム・マイン、ガンダム・マイン、ガンダム・マイン

最終的にガンダムは、ア・ハイア・クーに上陸後、ネオ・アズナブル搭乗のニュータイプ専用機、MSN-001 シオンと相討ちの形で人使しているものの、機体のMSとしては衡道の戦果も、シオン兵の間では恐怖とともに語り継がれた。説的戦いぶり、人々の心を揺るがすにつれて、かなりの誇りが加わったことは否定できない。この時代を象徴する機体として、人々の記憶に残っていくことになった。

そして後に、ガンダム、の名を抜き、掲げるMSには、ある資格一究極の機体であることが求められるようになっていったのだ。



一年戦争を戦い抜いたガンダムは、いつしか自衛の機体と呼ばれるようになった。



# RX-78-2 GUNDAM

## 闘いの記録

ジャブローでの戦いを経て、ついに決戦の宇宙へと上がったガンダム。そこに持っていたのは、ジオン軍の秘密兵器であるMAとニュータイプ・パイロットたちだった。大戦終局にむけて、激闘の事が上がる。

### BATTLE CHRONOLOGY

宇宙世紀  
0079年12月4日 ホワイトベース、  
サイド8のコロニーに到着

5日 地球連邦軍、アフリカ、北米にて  
ジオン公国軍機動戦艦を撃破

16日 ガンダム、コンスコン艦長の  
リック・ドムを全機撃破

24日 連邦軍、ソロモンを攻略  
ガンダム、ジオン軍宇宙攻撃軍司令  
ドスル・ザビと戦い、  
ビッグ・ザムを撃破 **初戦**

25日 連邦軍、ソロモンを攻略し  
コンバットと名づける  
ジオン軍、ソーラー・レイ・システム  
の戦術を覚える  
ガンダム、テキサス・コロニーで  
シャアのゲルググと交戦 **再戦**

29日 艦一号作戦（連邦軍の  
ジオン本土への進攻が目的）発令

30日 ガンダム、エルメスを撃破 **再戦**  
ジオン軍、ソーラー・レイで  
連邦軍主力艦隊の30%以上を消失  
させる

連邦軍はレビル将軍、  
ジオン軍はデキン・ザビ公王を失う

31日 連邦軍機動艦隊、  
ア・バオア・クーを攻撃  
ガンダム、ジオングと交戦し、  
相討ちに **決戦**

ジオン軍、ギレン・ザビ討死。  
キシリア・ザビ少将を失う

0080年1月1日 一年戦争終結  
ジオン公国、ジオン共和国となる

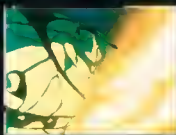


ア・バオア・クーでの最終決戦の瞬間

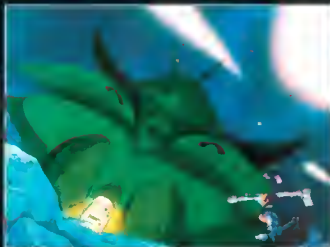
※デキン・ザビ、コロニーでの戦い（ソロモン戦）の月日は、  
TV版の戦いに基づいて記述したものです

### BATTLE DOCUMENT 06

RECORD  
TIME: U.C.0079.12.24  
PLACE: ソロモン  
ENEMY: ビッグ・ザム  
パイロットはドスル・ザビが



## 恐怖のビッグ・ザム



『フィールド・ジェネレーター』により、機体の周囲にビーム・バリアを形成する。



散れゆく機体、影の固まりのような強いプレッシャーを醸し、その意図の奔流は、ガンダムの機体を包み込んだ。

宇宙要塞ソロモン攻略戦の経験、連邦軍の陣営に斬り込んでいく一機の大型機動兵器があった。その名はビッグ・ザム。ジオン軍がひそかに開発を進めていた新鋭兵器MAである。

遠距離からのビーム攻撃を弾くビーム・バリアで守りを固め、多数のメガ粒子砲で武装したビッグ・ザムは、聞く間に多数の戦艦を宇宙の塵へと変えていった。

向かうところ敵なしと思われたビッグ・ザムだったが、至近距離から死角へ飛び込んできたガンダムが振るうビーム・サーベルによってダメージを受け、爆散するのだった。





# BATTLE DOCUMENT 07

## RECORD

TIME: UC0078.12.25

PLACE: テキサス・コロニー

ENEMY: ゲルググ

パイロットはシャア・アズナブル

# テキサス・コロニーの決闘

一年戦争の混乱のうちに放棄され、砂漠化の進む元光コロニー、テキサスで、ガンダムは今まで幾度となく激戦を繰り広げてきた相手……赤いMSと遭遇する。

それは、ガンダムをも超えるスペックを誇り、ビーム・ライフルとビーム・サーベルも装備した新型機、ゲルググだった。

砂漠の舞う荒野で、一対一の決闘が始まった。地形を利用して、あるいは相手の不意をつき、必殺の意志を込めた銃撃戦。そして戦いが展開される。

息詰まる攻防の末、ガンダムはゲルググを追いつめ、撤退させる。



ゲルググの機り出す攻撃は、新一年のところですべてがかわされる。ガンダムの反応速度は驚異的だった。



ゲルググは猛攻を繰り返す。ガンダムを地獄へと誘導しようとする。本気で戦わねば勝利にすらならなかった。



## シャアの駆る 新型MSゲルググとの 一騎討ち

# BATTLE DOCUMENT 08

## RECORD

TIME: UC0079.12.30

PLACE: コンバートウ・パオア・クールの戦場

ENEMY: エルメス

パイロットはララァ・スン

# ララァとの哀しい結末

## ニュータイプ専用機の脅威

サイコミュで機体を操るニュータイプ専用機エルメス。戦艦さえたやすく押し去ったその攻撃を退け、ガンダムはエルメスへ肉迫する。

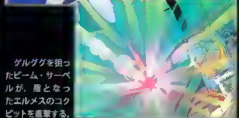
その刹那、両機のパイロットは精神を共鳴させるが、ビーム・サーベルに貫かれたエルメスは爆発し、二人の運命は一瞬で終わりを告げた。



機動隊台ビットによる全方位からのビーム攻撃。死傷の多いはずの攻撃も、ガンダムには届かなかった。



ビットを破壊され、本林のビーム砲で反響するエルメス。だが、ガンダムはそれを見逃さず、つづいていく。



ゲルググを狙ったビーム・サーベルが、最となったエルメスのコクビットを直撃する。

電光のように精神が走り、パイロット同士の間で共鳴する。

RECORD

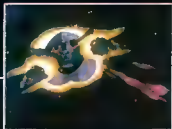
TIME: U.C.0078.12.31

PLACE: ア・バオア・クー

ENEMY: ジオン軍

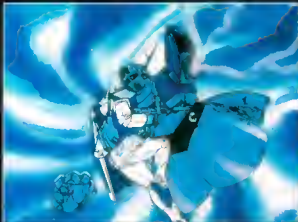
パイロットはシャア・アズナブル

# 決戦! 究極の戦士たち



ジオングはマニピュレーターが有線式ビーム砲になっている他、多数の武装を持つ。

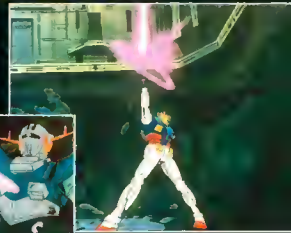
## 終局の戦場で激突する最強のMS



ジオングに肉迫するガンダム。敵の攻撃を押し、優勢に立ったと思われたが……



ジオングの機体で残ったのは、頭部のみ。ガンダムもまた、頭部と左腕を失うが、最後の一撃を放ってジオングを完全に撃破する。相打ちの強さは、パイロット同士の身命の闘いが繰り返された。



## THE RIVAL

ガンダムの前に立ちふさがった。ジオンが誇る数々のMS群。そのうち、ガンダムのライバルたる資格をもつのは、シャアが操る機体だけだ。

### YMS-14 ゲルググ

SPEC

全高/19.2m  
本体重量/42.1t  
全備重量/73.3t  
ジェネレーター出力/1,400kW  
スラスター推力/61,300kg  
センサー有効半径/6,300m  
装甲材質/複合ステール合金  
武装/バニム・ライフル  
ビーム・ナギナタ  
専用シールド



ジオン軍が大戦末期にロールアウトした。「遅れてきた名機」。ジェネレーターやスラスターの出力はガンダムを上回り（装甲材質はRXシリーズにある）、機体のバランスや運用性の高さも備えている。

### MSN-02 ジオング

SPEC

全高/17.3m  
本体重量/151.2t  
全備重量/231.9t  
ジェネレーター出力/9,400kW  
スラスター推力/187,000kg  
センサー有効半径/81,000m  
装甲材質/複合ステール合金  
武装/腕部メガ粒子砲  
腕部有線砲撃5連射メガ粒子砲×2  
本体メガ粒子砲×2



製造上にあつたニュータイプ専用機。ビグ・ザムの火力を持つ。また、サイコミュによる思考制御で、有線砲撃式の腕部メガ粒子砲を使った全方位攻撃が可能。コクピットのある頭部は、脱出ポッドにもなる。

## PILOT

### シャア・アズナブル

シャアは、赤く塗られたMSを操り、真実的な戦果を挙げた船長。「赤い彗星のシャア」と呼ばれ恐れられるようになった。ジオン公国軍の青年士官だ。

地球連邦軍のMS開発計画を執筆する作戦においてガンダムと初接触する。ホワイトベース部隊にとって最初の敵であり、機体と

なくガンダムと死闘を繰り広げることもある。強敵でもある。

一年戦争最終戦において、相打ちに終わったとは言え、ガンダムを撃破したのは、シャアのジオングだった。最後の強敵と戦い、倒れてきたガンダムだったが、やはりシャアの戦えるMSこそが、ガンダムのライバルであり続けたのだ。



PROFILE

宇宙世紀0099年、ジオン内戦の最中となったジオン・ズム・ダイクンの子として生まれる。一年戦争ではジオン公国軍の兵士としてパイロットとしても活躍するが、最終決戦で意思不明。ジオン降参と共に小惑星帯アクシズに落ちたものの、その後、地球連邦軍の士官クワトロ・バジリーナとして地球へと引き込まれる。クワトロ降参後、地球連邦軍特殊部隊「オーグ」の代名詞的なメンバーとして活動。宇宙世紀0099年、再びシャアを名乗り叛乱（第2次オース・ジオン戦争）を起こす。







イラスト：岡田兼治

# 黒いガンダム

一年戦争の災禍から7年、いまた運達のなかにある地球圏に、黒いガンダムが降り立った。それは圧政者たちの、断罪の斧。  
 構成：文：高嶋規之

岡島正晃  
 構成：文：高嶋規之

## 終わらない争乱と ティターンズの台頭

UC0080年1月に終結した一年戦争。人知しに、初めて「市」をも舞台としたこの戦いは、同時に人知しに、最悪の災禍をもたらしたことで最も高い電磁波を無力化するミノフスキー粒子、旧来の軍事トクドリンを、変えさせ新兵器MS、そして地球へのコロニー落とし、国力比にして地球連邦の30分の1以下であったにもかかわらず、シオン公国軍はこれらによって破竹の進撃を続け、実に総人口の半数を死にすらしめたのである。おそろしくこれ以上の悲劇は、歴史には存在しないだろう。たかき特有の人道を捨てて、地球圏に平和をもたらされることはなかった。

もとより一年戦争の背景には、開戦以前から続く地球連邦の行政が、神々の地球本土上義者の集結であった当時の連邦政府は、事実上の専断政策として増えすぎた人口を宇宙へと追いやり、抑圧をはいまいましてきたのである。無論、スペースノイドの自治独立を求める動きも少なかったが、そうした思想的背景がザビ家の暴走を許し、一年戦争が勃発。結果として、勝者である地球連邦に更なる圧政の大義を分けて与えてしまったのだ。戦後処理を終えて、スペースノイドの平復はすべし、地下に潜伏した旧ジオン軍残党もまた、手を取るべきであった。

その最初の表出が、UC0083年のデラズ紛争である。地球連邦軍とA.E.S社が秘密裏に開発した、格闘用の新型ガンダムを奪取したジオン軍残党、デラズ・フリーが、連邦軍の観戦者を強襲、多くの艦艇を撃沈せしめたうえ、無人のコロニーを北米大陸に落させたのだ。この事態に震え上がった連邦議会は、右派勢力によって掌握され、遂に出シオン軍残党の掃討を目的とした特務

部隊「ティターンズ」を結成。ほどなく地球圏全域において、ごく普通の学生や知識人層にまで弾圧の手が伸び、皮肉にも反連邦の気運を高めてゆく。やがて迎えた、UC0087年。憎しみの連鎖がもたらす新たな緊張の糸は限界まで張りつめ、もはやいつ切れてもおかしくなかった。

たからこそ、ティターンズは必要としたのである。スペースノイドを畏怖させ、基盤となる力を統括する「ガンダム」の力。

## 連邦系技術の集大成

民間人の少年に操縦され、一年戦争を連邦軍の勝利へ導いたと言われるMS、ガンダム。当時の地球圏において、その名は一種の戦場伝説となっていた。これに目をつけた連邦軍は、ティターンズの正統性を象徴する存在として、新型ガンダムの開発に着手したのである。

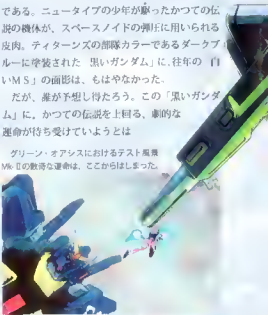
その最大の特長は、旧「超」モデルムーバブル・フレーム構造を全面導入したことであった。これにより、従来の機体とは比較にならないほど俊敏で、かつ人間に近い動作が可能となっている。だがその一方、装甲・構造材は旧式のチタン合金セラミック複合材。このアンバランスな仕様は、一年戦争後に吸収した旧ジオン系のMS開発技術を一応用していないことに起因する。もとより一般用では連邦内部において、幾多の政治的駆け引きと機密漏洩に関する疑心暗鬼、意地の張り合いが横行したであろうことは、想像に難くない。ムーバブル・フレームをして「我々の、我々による。我々のためのガンダム」と、いわしめたように、それは運達の時代を象徴する、高度に政治的なMSであった。

## 黒き抑圧者として

こうして完成した新たなガンダムは、「ガンダム Mk-II」と呼ばれ、3機の試作機がティターンズによって受領される。だが、一部にアンバランスな部分こそあれ、完成度は極めて高かったこの機体は、ティターンズはコロニー内戦開戦と考えていた。即ち、スペースノイドの反乱分子鎮圧用である。ニュータイプの少年が撃ったかつての伝説の機体が、スペースノイドの弾圧に用いられる皮肉。ティターンズの部隊カラーであるダークブルーに塗装された「黒いガンダム」に、往年の「白いMS」の面影は、もはやなかった。

だが、誰が予想し得たろう。この「黒いガンダム」に、かつての伝説を上回る、事ある運命が待ち受けているとは。

グリーン・オアシスにおけるテスト風景  
 Mk-IIの最悪な運命は、ここからはじまった。



黒い  
 イマ  
 40年戦争の  
 拡大に利用し、



ジム・クワエロ、  
 オースタス軍  
 隊の機体で、Mk-II  
 型機は戦後のティ  
 ターンズ主力機。対人  
 戦に重視。センサ  
 ー性能の向上が  
 図られている。ムー  
 バブル・フレーム  
 の先駆けになる技  
 術が採用されてお  
 り、Mk-IIの機体と  
 した。





## 白き解放者へ

「Mk IIの開発経緯を見れば明らかなように、地球連邦は決して 牧畜ではなかった。その内部にすら、ティターンズをよしとしない勢力は存在したのだ。Mk II完成と前後して、地球連邦軍指揮ブレックス・フォーラム起るにティターンズ勢力 エウゴ が、連邦軍主流派に反旗を翻した。」

時はU.C.0087年3月2日、エウゴのMS部隊がMk IIのテストを行っていたクリン・オア



第1次ネオ・ノオン  
戦争ではエル・ミアン  
の乗機となり、カ  
ラム・チム・の  
命を助けた。

「… 機械の存続に成功する  
運命のたすけ」すなわち「うち1機はティター  
に送るを望まれた」と同じくもう1台「カムィー」も  
1台で「それはまるで『戦艦大和』の沈没の出来事  
を見るかのようにある。たゞに戦艦の1機も、ティ  
ターと決別した加藤隊員は、エマーソンによって  
てエウロビの船艦アーカマに到着。機体力率」を  
用いた「力率」と改められ、以降カミエの「のちに  
はエウロビの戦艦として、エウロンとティターの  
全面抗争。タリブス戦艦を戦い、戦く。さらにそ  
の戦結末も、結局第1次エウロン・オラン戦争まで  
エウロビの「戦艦」として戦い続けられた。

日政者の思惑で誕生した、黒い機体。たかそれは日い姿へと転生し、自由と解放の象徴となった。混沌の時代を駆け抜けた本機。ガンダム Mk IIこそ、史上最も、劇的なガンダム。なのである。



た。肉で置き換えられるん

## Basic Knowledge of G

変わりゆく世界

一年戦争、デラズ紛争を経て、地球  
国はいかに変わったのか。

## コロニー再生計画とサイドの再編

健人口の半分が死亡するという未曾有の災厄をもたらした今年まで、無論その終結後には、地球国は自衛戦争と一戦をしかねた。コロニーが着落し、コロニー周辺が消失した地球のオーストラリア大陸はもちろん、各サイドもまた大きな被害を受けていからである。このため戦後には、各コロニーからの難民問題が顕在化し、連邦政府とコロニー公社は、移住コロニーの移住と新規建造を軸とする「コロニー再生計画」を実行し、その過程でコロニーと新地とに接近しなれたこととせよ。

具体的には、戦後当初のジアン公園軍の電撃戦で攻撃対象となった旧サイド4（ムーア）が新戦にサイド6、旧サイドウム戦役で事実上滅亡した旧サイド5（旧ウム）が新戦でサイド4とされ、これに伴って中立的コロニーであった旧サイド6にサイド5のナンバーが振り置かれている。コロニー落としに先立ち、G3ガースで住民が救済された旧サイド1（ハッチ）は再建の過程にあり、UC0087年時点で50%以上のコロニーを壊滅している。旧サイド7（ノア）は名

## アクセシブの動向

コービーの死のすまじろ候補地としては、ジョン公使が火  
 星と水曜の間のアサロイド・ヘルトに選んでいた小水  
 星基地、アクシオンがある。地球側から観測したところ  
 だと、内側に金星がすぐで、そのすぐ内側は自太陽の方向  
 ために暗黒後は「ジョン公園」見物の遊覧所となっていた  
 結果、戦後は喜望峯に丘が聳るが、独自の道にMS軍  
 結束を導く小水星国境の終点に成している。無難、その  
 「問題」はジョン再興による、UC.0083年のデラーズ戦争  
 では戦術的に支援陣地を派遣。この時は立て直った連邦と  
 兵を戦えるのを避け、主としてデラーズ陣地の生え残り  
 兵を徹底的に叩くことで、UC.0085年には遂に小水  
 星に脱出した残兵・エンジンに力点。地球側の移動  
 軌道に脱出した後、UC.0087年に地球側にも追。グリアブ戦  
 で陣地の一角を削り、続く1次ネオ・ジオン戦争では、  
 連邦軍の主力となったエーグと会戦衝突した。

图例 城北惠大

グリブス戦役開戦時の  
**地球圏勢力図**

平定县志

旧ジオン公国軍高官達が運営する小惑星基地。旧公国軍人を中心にジオン公国の復興を目論んでいる。

## アースノイ

地球居住者達は、かつては特権  
にある者選だったが、地球連邦政  
の無策と地球環境の劣悪化により、  
弱っている者も多し。

地球連邦政府

地球至上主義を燃やそうとせず、スペースノイドへの反感を燃やしている。

## スペースノイト

スペース・コロニー半ば強制的に移民させられた宇宙居住者達とその子孫 地球連邦政府への不満を募らせている

1 脚区

### エウーゴ

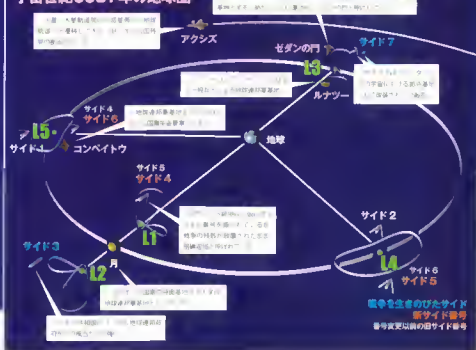
ラバ

エウゴと協調し、地球で活動する真正網軍、地球市民と反ディターズ志向をもつ選別軍勢力によって構成される。

## アナハイム・エレクトロニクス社

註：編者も著者、受取票と送金の差支に、 $\bar{P}$ のつは、し、取換票、受取票と送金に、 $\bar{P}$

宇宙世紀0087年の地球圖



# ガンダムMk-IIの設計思想

特殊な開発経緯をもつガンダム Mk-IIは、いささか非効率的とさえいえる保守性と、いくつもの抜きん出た先進性を併せ持つ、希有な機体であった。これより、その詳細について紹介していく。

## ムーバブル・フレーム

外骨格から内骨格構造へ。Mk-IIの仕様のうち、最大の特長となっている極めて革新的な事項が、このフレーム構造の採用である

ムーバブル・フレームとは、MSを骨格と筋肉を持つ人間に立足し、神経の代わりに各種電装系を、血管の代わりに燃料系を、筋肉と関節の代わりに駆動系をフレームに組み込んだ方式で、ガンダム Mk-IIにおいて初めて実用化された。

それまでのモノコック方式（ジオン公国軍あるいはセミモノコック方式「地球連邦軍」とは違い、主関節と補助関節を組み合わせた複合式関節を採用、さらに装甲をフレームから切り離すことで関節の可動域を大幅に広げられるという、設計上の革新をもたらした

この方式は、フレームのスライドや回

転軸に合わせて装甲が移動することで、関節への干渉を極限まで抑え込むというコンセプトのもとに考案されていた。

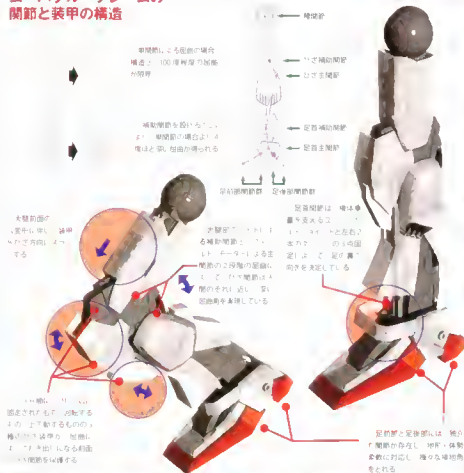
また、可動範囲の拡大のみならず、関節の屈曲によって露出する関節部をカバーするという、防衛面における特性をも獲得している（下図参照）。

従来の方式と比べると、可動部位が増えた分、部品点数も増加しており、整備が煩雑となったことは否めない。

だが、第1世代機に比べて機体の運動性が大幅に向上したことは間違いないく、この技術の確立を以て、MSは大きな進化の道へと一歩踏み出したのである。



## ムーバブル・フレームの関節と装甲の構造





## 全天周型モニターとリニアシート

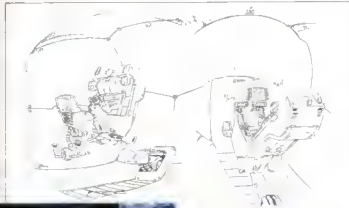
機体の周囲をほぼすべて映し出すモニターと、磁力で半ば浮遊した状態にあるシートは、この時代の標準的な仕様となっていた。

ジオン公國軍がMSを初めて実戦に投入したころは、対宇宙戦艦艇および対基幹戦艦が主任務だった。だが地球連邦軍がMSを主力化させると、交戦距離が極限まで狭まり、「MSの敵はMS」という状況が頻発。操縦系統の設計を技術環境の変化に合わせる必要が生じてきた。

当然のことながら、従来型のコックピットレイアウトではなにかと不都合が生じやすく、実際、連邦軍兵器開発局MS審査部に属するテスト・パイロットからも、

なんらかの改善を施すべきだという意見がなされていた。

そうした要求から生まれたのが、全天周型モニターとリニアシートを組み合わせたコックピット設計である（MSの小型化がトレンドとなる宇宙世紀20120年代まで、主流を占めた）。球形に近いモニターを採用することにより、簡略とされた機体の構小化に成功。さらにリニアシートは身体への負担を和らげる効果を発揮し、作戦行動時間を大幅に延ばす結果をもたらした。



## 政治が技術に優先した材質選択

最先端の機体であるべき「ガンダム」の名を冠しているが、Mk IIにガンダリウム合金が採用されなかった理由は……

ガンダムMk IIの装甲材であるチタン合金とミミック合金材は、一世代前の古い材質である。この点においてMk IIは、時代遅れの機体だと言っても過言ではなかった。

ただこれは、ティターンズが連邦の技術にのみ拘った結果であり、当時の開発局自体はこの使用決定に、大きな不満を抱いていたといわれる。



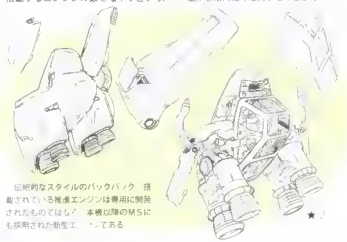
確かに材質は古いが、それによって機体の強度が向上することはなかった。

## あえて新機軸を排除した推進器

あらゆる面でトップレベルの性能を求めたMk II。高い推力を得るために開発陣が選んだ手段は、ごく簡単なものだった。

カンナム神話の再現を望むティターンズは、Mk IIに高い推力をもつエンジン搭載を求めたが、次世代機の設計となる以上、量産品以外の採用は許されなかった。そこで開発陣が採り出したのは、搭載するエンジンの数を増やすという、

空機簡単な手段だった。しかしシンブル・イス・ハートの言葉が示す通り、時には単純な方法こそが正解となることもある。事実、量産品だったために整備と部品の補充が容易で、操縦士に高く維持することできた。



伝統的なスタイルのバックパック。搭載されている推進エンジンは専用開発されたものではなく、本機以降のMSにも採用された標準品である。

## 脚部ユニット構造とコ・ジェネレーター

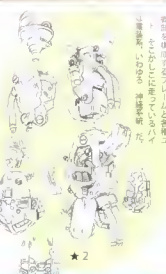
ふくらはぎのスラスターを十分にドライブすることが可能な高出力のジェネレーターと、ムーバブル・フレームの剛性とは？

MSには複数のジェネレーターが搭載されているが、その出力レベルと積まれている数や性能の高低を決定すると考えても過言ではない。

つまり出力の高いジェネレーターを積み増せばほぼ確実に性能が向上するのだが、この時代の技術では高出力ジェネレーターは大型にならざるを得ず、機体のキャパシティに限界がある以上、搭載できるジェネレーターの数をその出力は常に制限が付きまっていた。

しかもバブル・フレーム方式が登場したことで、MSの設計はひとつのブレイクスルーを迎える。ユニット化したコ・ジェネレーターをフレーム内部に組み込むことで、物理的キャパシティの問題をクリアしたのだ。

これによって、Mk IIの脚部はその出力の高さにも拘らず、非常にコンパクトな設計となっているのである。



## ガンダリウムYと第2世代MS

ガンダリウムYと呼ばれる新材の登場は、さらなるMSの進化を促すことになった。

ガンダリウムYとは、旧ジオン公國軍の機体「アクシズ」がMk II-78-2ガンダムの換装材「ルナ・チタニウム合金」を廃止、研究して生み出した。軽量化しつつ強度を維持する新材材である。

いざさか強しな機体でこの技術を手に入れた。月のアハイム・エレクトロニクス社は、さっそく新型MSの開発をはじめた。開発チームの陣営は旧ゼンONIC社系の技術者を中心としたもので、完成した機体はさすがに旧ジオ

ン公國軍の機体MSドムを思わせた。これが換装材費における第2世代機の増大となったリック・ディアスで、その優れた性能は地球連邦軍、特にティターンズに高い需要を生じた。

さらにこれら技術は、可変機をもつ第3世代MSを生み出した。機体のブロック構造と可変性は、スラスターの推力を一方に集中させる変形を可能にし、MSに高機動化と移動可能距離の増加をもたらしたのだ。



エアーゴの主力を担ったRMS-099リック・ディアス。旧軍の機体として非常に軽便で、そのぶん量武装が特徴だった。

# Weapons of RX-178

交換式エネルギーパックを採用したビーム・ライフルや、装弾数の問題をクリアしたバルカンとバズーカなど、Mk-IIの武装の数々を紹介する。

## 専用ビーム兵器

★ 1



### ビーム・ライフル

Mk-IIの主兵器。XBR-87C。史上初めてエネルギーパック方式を採用した専用兵器として知られる。

そもそもビーム・ライフルとは、ミノフ粒子を一粒子で通過する前まで圧縮させることでメカ粒子を生成、それを弾体として任意に撃ち出す兵器であり（これをエネルギーCAP方式と言う）、その正体は携行型メカ粒子砲にほかならない。

ビーム兵器としてはこれに優るものはないと言われるメカ粒子砲だが、実用化から数年を経た0080年代においても、そのトライバルには重大な電力が必要とされるため、これをMSで運用できるようにするには、エネルギーCAPの生成を母艦（あるいは拠点）で行うほかなかった。

つまり弾切れになった場合、MSは後方に置いてエネルギーCAPを充満するが、もしくは充満済みのビーム・ライフルに兵装を交換するという手段しかなかったのである。当然のことながら、作戦や戦術は少なからず影響を受けること

### ビーム・サーベル



高エネルギー状態のミノフスキークラスタを、ロケットで対向の用に放射させて闘い、

★ 2

## 実弾兵器

Mk-IIにはビーム兵器の他に、ロケット・ランチャーや外装式の機関砲といった、弾頭・装薬を詰めた物理弾や実弾を用いる兵器も用意されていた。こうした兵器は作戦に応じてチョイスされ、機体各部のマウント・ラッチに装着して出撃することになる。

特にMk-IIはマウント・ラッチを多数備えているので、搭載できる兵器の数が他の機種に比べてはるかに多く、そのぶん高い戦力発揮が可能であった。



## 防御装備

### シールド

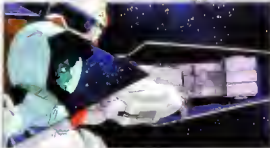
シールドにはデブリ・ビーム・コーティングが施されているが、耐えられるのは2〜3発までである。



★ 1

### シールド・ランチャー

これはMk-II専用に開発されたものではないが、マウント・ラッチの規格さえ合致すれば互換させることは難しくない。



シールドには敵弾や破片などから機体を守る防衛だけではなく、予備のエネルギーパックや武器などを収める機能も付与されている。さらに、打突攻撃に用いることができるよう、先端部が鋭く尖っている。

また、本体は2枚の装甲板から構成されており、必要に応じてスライドさせ全長を短くすることも可能だ。背後の機体庫にとって兵備の収納空間の問題は切実なため、この仕様は大いに歓迎された。

### ハイパー・バズーカ

★ 2

交換式弾倉を採用している砲撃システムともかく、構造は非常にシンプルなため、高い信頼性を誇る。



### バルカン・ポッド

向かって左側が弾倉、右側が機体庫マウントである。過負荷時に搭載した実弾兵器。

★ 1

# マークⅡ ガンダムMk-IIの支援機材群

スーパー  
ガンダム

高性能な新型MSに対抗するべく、ガンダム Mk-II の機動性向上と武装の強化が図られた。

## ガンダムMk-IIの性能を高める可変戦闘機 FXA-05D Gディフェンサー

### 火力と機動性を大幅に増強

本機は性能的に見るとはじめていたガンダム Mk-I を、ふたたび一歩先のMSたらしめることを目的に開発された補助機材である。しかし Mk-II を上回る推力を誇り、単体でもじゅうぶんな戦闘力を有しているため、単なる強化装備にとどまらず、大型戦闘攻撃機として用いられることも多かった。

その場合はMSが牽制役を務め、Gディフェンサーはトドメを刺す役割を担った。

#### SPEC

全長 35.5m 機体全長 27.5m 全高 27.1m  
全重量 74.7t 全備重量 60.3t  
スラスター数 14 出力 84,800kg  
装甲材質 カンダウム合金  
武装 レーザー砲×2 バリッド砲×4  
14 連装ミサイルポッド×2  
ロング・ライフル

#### コクピット



Gディフェンサーのコクピット・モジュール・コア・ファイター。機関砲を2門備える。

#### 武装

Gディフェンサーの主兵装はロング・ライフルだが、この他にもミサイルや、機関砲など実弾兵器も装備している。

#### ロング・ライフル

標準装備のビーム・ライフルよりも威力増強をもつ。

#### ミサイル・ヘイ

機体の左右に張り出したハインター内には、ミサイルを装備している。

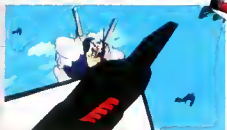
#### Gフライヤー

Mk-II と合体して戦闘機形態。近距離を移動する場合には欠かせない。

## 大気圏突入用の新装備 フライング・アーマー

### MSの機動性を生かす特殊機材

フライング・アーマーは、アナハイム・エレクトロニクスで開発が進められていた可変MS、Zガンダムのために製作された試験機を利用して急遽造られた機材である。しかし水上滑走機能等を有するなど、急ごしらえとは思えない性能をもつ。



Mk-II を載せて 通称本部ジャブローに降下してへ

## Mk-IIを運搬する大口徑ビーム砲搭載機 FXA-08R メガ・ライダー

### 攻撃力と機動力を拡張

本機はグリアス戦役の後半に開発は始まり、第1次ネオ・ジオン戦争に際して実戦に投入された。これはメガ・ランチャーに爆震系と原性殺菌を付与した、一種の移動砲台であり、MS単体の火力では達することが難しい堅牢な陸地や戦艦の撃破を目的に建造された。



このようにメガ・ライダーで爆撃する







# RX-178 ガンダム Mk-II

## 闘いの記録

迅速満ちる宇宙と地上とを駆け抜けたガンダム Mk-II。歴史のうねりの只中で、刻の涙を見つめ続けてきたその機体は、やがてパイロットたちの願いを背負って、新たな時代の先鋒となっていく……。

### BATTLE CHRONOLOGY

- 宇宙世紀  
0083年12月4日 ティターンズ結成
- 0084年  
ガンダム Mk-IIの開発着手
- 0085年7月31日  
30パンチ事件起こる  
ティターンズ、反乱勢力の強いサイド1の  
コロニー住民を、G3 ガスで虐殺
- 0087年  
ガンダム Mk-IIの試験運用開始
- 3月2日  
エウゴ部隊、民間人カミーユ・  
ビダンの協力のもと、  
グリーン・オアシスより  
ガンダム Mk-IIを盗奪
- 5月11日  
エウゴ、地球連邦軍の  
ジャブロー基地を攻撃
- 6月  
ティターンズ、ニュー・ホンコンを襲撃  
サイコ・ガンダム、実戦参加
- 8月17日  
エウゴのフォーラム提議、暗殺される
- 9月  
エウゴ、Zガンダムと  
Gディフェンサーを実験配備
- 10月12日  
ハマーン、カーン率いるアクシズ、  
地球圏に降臨
- 11月2日  
エウゴ、キラミヤジロ基地を襲撃
- 16日  
エウゴ、ダカールの連邦議会を占拠  
シア、ティターンズ兵員の演説を行う
- 0088年1月25日  
ティターンズ総帥ジャミトフ・  
ハイマン、暗殺される  
木暮エメルギー船団の襲撃、  
シロッコがティターンズを襲撃
- 2月2日  
エウゴ、メールシュートローム作戦にて  
ティターンズのコロニー・レーザーを奪取
- 22日  
グリプス2を襲り、エウゴ、アクシズ、  
ティターンズによる三つ巴の総攻撃を行う
- エウゴのコロニー・レーザー奇襲に  
よりティターンズ降参、機體  
エウゴも能力の大半を喪失  
ガンダム Mk-II大躍  
パイロットのエマ・シーン死亡  
ティターンズ、崩壊
- 29日  
アクシズのハマーン・カーン、  
ジオン内戦を宣言（ネオ・ジオン誕生）  
第1次ネオ・ジオン戦争、勃発
- 8月1日  
ネオ・ジオン本拠、地球降参
- 0089年1月17日  
ハマーン・カーン暗殺  
エウゴ、ネオ・ジオンを制圧  
第1次ネオ・ジオン戦争、終結

### BATTLE DOCUMENT 01

RECORD  
TIME: UC0087.3.2  
PLACE: サイド7、グリーン・オアシス  
ENEMY: ティターンズMSガンダム Mk-II  
パイロットはカクリンとジェリド

ロールアウトした3機のガンダム Mk-IIは、グリーン・オアシスでテストを開始。だが情報を知ったエウゴが、その奪取に動き出す。同じ頃、ジェリド・メサ中尉のMk-IIが、基礎を誤って連邦軍ビルに墜落。そのジェリドを助けたことで尋問を受けていたカミーユ・ビダンは、ティターンズの理不尽に怒り、混乱に乗じて3号機を奪取する。全く予想外の黒いMk-II同士の戦い。これにより、エウゴは2機のMk-IIを奪取することに成功した。

強奪された Mk-IIは  
エウゴの主力に……

### 衝撃! Mk-II vs Mk-II



カミーユは自分を  
乗っ取ったMk-IIを  
直撃し、さらには  
カクリンの2号  
機を不意打ち。



カクリンをコックピットから降  
ろすと、エウゴのMSと同等と  
もに機体を解凍し急いだ。

### BATTLE DOCUMENT 02

RECORD  
TIME: UC0087.6  
PLACE: ニュー・ホンコン  
ENEMY: ティターンズMSサイコ・ガンダム  
パイロットはフォー・ムラサメ

### 肉薄! サイコ・ガンダム



ニューホンコンに現れたサイコ・ガンダムは、  
不安定なフォーの心そのままに暴れまわる。



### 桁外れの巨体が Mk-IIに迫る

ジャブロー攻撃の後、カラバに合流したMk-IIを、巨大MS  
サイコ・ガンダムが追撃。パイロットの強化人間、フォー・ム  
ラサメと心通わせるカミーユは、単身迎撃を試みるが……。



コックピットを出て直  
面するカミーユ。その  
思いを置いて、フォー  
は洋上に墜つた。



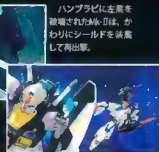
RECORD

TIME: UC.0088 2 22  
PLACE: ルナツー軍機グリス2近衛  
ENEMY: ティターンズMSバラス・アテナ  
パイロットはレコア・アロンド

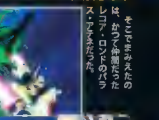
グリス2のコロニー・レーザーを手にする陣営が、この戦いの勝者となる……。エウーゴ、ティターンズ、アクシズ、三つ巴の戦いとなったグリス2戦役は、ついに最終局面を迎えようとしていた。その最前線で、エマ・シーン中尉の駆るMk-IIも、激突奮闘の活躍を見せる。敵はティターンズのハンブラビ。そして最新鋭機バラス・アテナ。激突奮闘になりながらも、分の悪い戦いに勝利を収めるMk-IIだったが、その代償は余りに大きかった。



# エマ機、最期の出撃



## 傷だらけで戦い抜いたコロニー・レーザー攻防戦



苦しい勝利を収めるMk-IIだったが、敵機の爆発により大破。エマも負傷し、捕らぬ人となった。



## PILOT 数奇な運命を共にした多くの戦士たち

### ジェリド・メサ



#### PROFILE

米西部の無人空間に生まれた、24歳。才気溢れるパイロットだが、母を失った悲しみからミューと距離を置く。機転を利かすことなし。

### エマ・シーン



#### PROFILE

幼少期は米西部無人空間の出身。24歳。ティターンズの戦役を知ってエウーゴに参入し、米西部には性格から悪く思われる。たちのけの精神面となる。

機体カラーと所属陣営を変え、グリス2戦役と第1次オースティン戦争という2つの戦いを駆け抜けたガンダムMk-II。それだけに、本機は歴代ガンダムのなかでも、最も多くのパイロットに乗り継がれている。

まずティターンズ所属の「黒いガンダム」としては、ジェリド・メサ、カトリコン・カウラー、エマ・シーンの各中尉が、テスト・パイロットを務めていた。ことにジェリドは買われたMk-IIを道連れ扱い、図抜いた人生を送っている。

一方、自らの良心からティターンズを脱反し、3機のMk-IIのうち1機をエウーゴにもたらしたエマもまた、Mk-IIの数奇な運命を象徴するパイロットだろう。エウーゴ所属となったMk-IIは当初カトリコン・ビダンの乗機だったが、彼がZガンダムに乗り換えて以降本機を愛護カチ・コバヤシのGディフェンサーと連携し、主戦力の一角として多大な戦果を挙げている。その彼女が、エウーゴを裏切ってティターンズについていたレコア・アロンドと対決できるように決めたのは、皮肉と言うほかあるまい。

エマ亡き後のMk-IIは、当初はアーガマ・のちにキャス・アーガマの所属として第1次オースティン戦争に参加。主として元民間人の少女エル・ビアンノによって操縦されたメカライダーと共に「カンダム・チーム」の一員として活躍した。

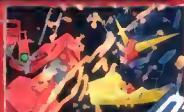
## THE RIVAL

開発技術と実戦の両面で、多くのライバル機が火花を散らす

### RMS-099 (AE社内部試作機 MSA-009) リック・ディアス

#### SPEC

全高 18.0m (全長 18.7m)  
本体重量 32.7t  
全機重量 54.7t  
ジェネレーター出力 1183kW  
スラスター推力 14,000kg  
センサー検知距離 115,000m  
機動性 高/ガンダムの全機  
武装 バトル・フィールド・システム  
ビーム・サークル  
ビーム・バスター×2  
クレール・バズーカ  
ビーム・ライフル



旧ジオン系の技術を用いた機体。高性能の第2世代MSで、ムーバブル・フレームと同様のブロック・ビルドアップ構造を持つが、フレーム性能はMk-IIに劣るなかった。

### RMS-108 (AE社内部試作機 MSA-008) マラサイ

#### SPEC

全高 17.5m (全長 20.3m)  
本体重量 33.7t  
全機重量 59.4t  
ジェネレーター出力 1,700kW  
スラスター推力 14,000kg  
センサー検知距離 140,000m  
機動性 高/ガンダムの全機  
武装 射撃/射撃/射撃×2  
ビーム・サークル×2  
ビーム・ライフル  
シールド



Mk-IIを失ったティターンズに、AE社が提供した機体。第2世代機だが、Mk-IIには劣る性能を誇らる。結果としてMk-IIの基本設計の優劣を証明することになった。

# 地上に降りたガンダム

激濃の進撃で地球に侵攻したジオン公国軍。たか地球連邦地上軍には、僅かな数で決死の抗戦を続けるガンダム・タイプMSの姿があった。歴史の狭間で隠れた活躍をみせた、初の量産型ガンダムの真実に迫る。

構成・文 岡島正晃  
高崎規之

## 一年戦争における 地球連邦地上軍の苦闘

誰も予想し得なかった、徒竹の進撃。U.C.0079年頃に幕を開けた一年戦争の開戦当初、ジオン公国軍の重戦車は、まさにそう呼ぶに相応しいものだった。連戦連勝とルウム戦役において、ミノブスキー粒子の高濃度散布と新兵器MSによる接近戦によって、連邦軍艦隊に壊滅的打撃を与えたからである。

だがMSの有用性は、宇宙においてのみ発揮されたわけではない。前述の2会戦を経た南極条約で事実上の降伏を引き出せなかったジオンは、そのまま地球侵襲作戦を敢行。対国軍MSは連邦軍の地上兵器を次々と破壊し、僅か3ヵ月で地球のほぼ半分を制したのである。

とはいえ連邦地上軍もこの惨状を舐めて眠っていたわけではない。敵のMSに抗し得る唯一の兵器、即ち自軍製MSの開発に邁進していたのである。すでにこの1力機 RGM 79シリーズは開発が進んでいたが、地上には、制の弱さもない。そこで連邦軍は、シムの試作機であったRX 78ガンダムの開発費を基に、地上用MSの急造に着手。ガンダムの簡易生産型であるジムとは異なり、リアル・ナタール合衆国の装甲をはじめとする高い性能を備えた機体を独自開発する。この機体は RLM 79(C)陸戦型ジムの名を冠し、10月からの実戦配備が決まった。

だがその生産性は低く、絶対数不足はいかんともしがたいと思われた。

### 陸戦型ジム

地上用に改造された連邦軍初の量産MS。性能は優秀だが、地上での互換性は少ない。

## RX-78 の部品を用いた “間に合わせ” の高性能機

一方、連邦軍の戦術開発局には、試作されたRX 78ガンダムの余剰部品が豊富に存在していた。プラモデル・モデルとして開発されたガンダムにおいては、各部品の検査基準が極めて厳しく、充分使用に耐え得るが、検査にはパスできなかった部品が大量に発生していたのである。陸軍省はこれに目をつめ、開発中だった陸戦型ジムの一部に搭載。MSの数不足を少しでも補うとともに、それらを陸戦型ジムより優秀なエース向けの機体として再生する。この結果生まれたのが、MS史上でも極めて珍しい、量産型ガンダムのひとつ、RX 79(C)陸戦型ガンダムであった。陸戦型ジムと生産ラインを共有するこの機体は急造で生産され、1数機がロルマウト東南アジア戦線をはじめとする地球各地の最前線に送られた。



運用面では非バーニアックと連携、驚異能力を補う

## 厳しい局地戦の果てに 役目を終えたガンダム

かくして実戦投入された陸戦型ガンダムは、すぐさまその「素性の良さ」を証明する。余剰部品による信頼性のバラつきを抑えるため、大半の機能にはリミッターが設けられたにもかかわらず、その戦闘能力はジムやザクの比ではなかった。陸戦型ジムに比べ、遙かに高出力なビーム兵器の運用も可能なジェネレーターを有し、さらに緊急時にはリミッターを外してのフルパワー駆動も可能。この陸戦においては、「RX 78と同等」とまで言われたその高性能で、ジム量産までの地上戦線における救世主となったのだ。

だがその一方、陸戦型ガンダムの名声は後世に



残ることがなかった。そもそも「間に合わせ」の機体だった本機と陸戦型ジムの設計は、のちの機体に一切継承されなかったからである。連邦軍の戦いがMSの物語へとシフトするなか、徒花となって消えた陸戦型ガンダム。その活躍は、本機を受領する荣誉に浴した、押りのパイロットたちの記憶にだけ、鮮明に焼き付けられているのだ。



出自が自国だけに、準備品品の機体的な不足も修理や改修は現地での調整任せという事情もあった



黒色を留めぬほどの局地戦で戦い続けた時もある

# RX-79[G] GUNDAM GROUND TYPE



## SPEC

全高機 18.0m  
 全幅機 52.0m  
 全備機重 73.0t  
 1機当り出力 110kW  
 1機当り出力 52,000hp  
 センサー有効半径 5,900m  
 機体材質 アルミ・チタン  
 装甲材質 ナイロン・チタン合金  
 武装 25mm 機関ハイドロガン砲×2  
 脚部 12.7mm 機関式16口径  
 ヒーム・サーベル×2  
 100mm マンガンガン  
 180mm キャンオン  
 ビーム・ライフル  
 ノールド

## SPEC

全高機 18.0m  
 全幅機 52.0m  
 全備機重 73.0t  
 1機当り出力 110kW  
 1機当り出力 52,000hp  
 センサー有効半径 5,900m  
 機体材質 アルミ・チタン  
 装甲材質 ナイロン・チタン合金  
 武装 25mm 機関ハイドロガン砲×2  
 脚部 12.7mm 機関式16口径  
 ヒーム・サーベル×2  
 100mm マンガンガン  
 180mm キャンオン  
 ビーム・ライフル  
 ロングレンジ・ミサイル  
 ミサイル・ランチャー  
 ネット・リール  
 ノールド

**RX-79[G]Ez-8  
GUNDAM Ez8**

イラスト・小笠原智史

# 陸戦型ガンダムの設計思想

地上での運用を前提としたガンダム、RX-79[G]には、コア・ブロック・システムの不採用以外にも、数多くの仕様変更が施されていた。

## 重力下戦に合わせたコクピット設計

RX-78とは異なり、胸部中央に据えられたコクピット。コア・ブロックの廃止により、機体胴部の剛性は大きく上がっている。

RX-78——連邦宇宙軍M5は無重力空間ばかりでなく、スペース・コロニー内部などの重力下でも運用することが求められるため、高用機としての性能をもっていることは言うまでもない。

しかしRX-79[G]——連邦地上軍M5が地上戦以外の作戦に投入されることは原則としてあり得ないので、同じ“M5”と言ってもその在り様は大きく異なっている。搭載されている電子機器が宇宙軍機のアビオニクス（航空機搭載電子機器）に対し、ベトロニクス（車輛搭載電子機器）と呼ばれていることから、それが理解できるだろう（この時代には、モビロニクス——Moblronics：M5搭載電子機器という造語は、存在していない）。

また、宇宙軍が地上軍へのソースコードの提供を行ったため、機体制御用にはわざわざ新機に開発したソフトが使用された。このようにRX-79[G]はRX-78を基礎に置きつつも、地上軍独自の技術によって進達された機体なのである。



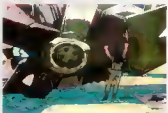
■後視鏡の採用により、機体の急な降りや宇宙軍機に比べて非常に堅固になった

## 地球環境に合わせた装備

陸戦型ガンダムは多様な装備を持ち、重力下での運用に関して言うなら、その対応力は原型機たるRX-78をも凌ぐ一面もあった。

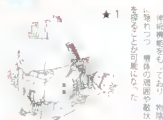
地球という多様性をもつ環境で運用するため、RX-79[G]は原型機であるRX-78を上回る、地上軍M5独自の装備が開発された。RX-78-2が、何の調整も追加装備もなく演習機をこなしたことを考えると、スペックが低下したと受け取られかねない。だがこの時代において、簡単な防砂装備を追加するだけで、砂漠を戦場に替えると変わらぬ性能を発揮したのには、実戦機としては十二分に高い性能をもっていたと言えるだろう。

### ■防砂シリーing



可動部分に砂が入り込まないように製作された、キャンバス地カバー。

### ■頭部シュノーケル・カメラ



### ■降下用パラシュート



空軍作戦に用いる制動ロケット付きのパラシュートパック。装備コンテも兼ねる

## 出力制限による熱核反応炉の安全性確保

余剰パーツの使用による機体コストの性能のばらつきを抑えるとともに、地上での安全な運用のため、リミッターが設けられた

陸戦用M5の実用化に当たり、地球連邦軍の技術側が最も心を砕いたのは、熱核反応炉の安全性の確保についてだった。M5に搭載する以上、堅牢さは望むべくもなかったが、被弾した場合、連鎖反応によって爆発が容易に起こらぬ設計が必要とされたのである。開発陣はこの問題に、熱核反応炉に出力制限を設けることで対処した。なにしろ、熱核反応炉が爆発すればどうとでもない被害が生じるのだから注意を払わざるを得なかったのである



出力制限の解除は「熱核」その機体が「1」で、即ち出力停止でせう。ま

## 現地部隊による改修

装甲形状が変更され、固定武装も交換。さらに「前」までもが差し替えに、などどのような処置が行われたのか



RX-79[G]は補充部品の確保が困難なため、損傷時にはあり合わせの部品を用いた改修を受けた

そのもつとも顕著な例はE28と呼ばれる、シロー・アマタ少尉の乗機だった。より耐弾性の高い形状の装甲を調い、扉にはライフル使用時の降着姿勢を安定させるスライクを追加。胸部の固定武装も変更している。また、弾が弾び込むのを防ぐため、装甲表面の凹みや機体前面に空いたエアインテークを徹底的にカートすると、使用環境に即した改修が施されている



機体機軸の壊れる部分の修理は、E28で可能で、同年の4GCM 1900が、独自の製作したものとなつた



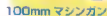
## Weapons of RX-79[G]

地上での戦闘は、さまざまな地形条件の影響を受ける。また、長距離から中距離戦闘、格闘戦までが行われ、そのすべてに対応した兵装が必要だった。

### 短·近距離兵裝

MSがミノフスキー粒子を用いた電子素子の駆動化によって生み出された以上、目標による軌道への対応を求められるのは、至極当然のことだった。開発時に想定された敵が宇宙戦闘機や軍艦がなかったシオン公園軍と違ひ、すでにサクという敵が存在していた地球連邦軍の場合は、最初から対MS戦闘を念頭に置いた設計を行うことができた。MSの開発において、これは大それたことではなかった。

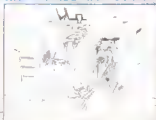
地取連邦軍のMSの主兵装、ビーム・スプレーガンやマシンガンが、概してシオン公国軍のサク・マシンガンなど同種の兵器より小型で取り回しが良いのは、敵MSとの接近戦を展開することを前提としていたからにほかならない。確かに威力の大きな兵器は魅力的だが、敵が懐に入りこんだ場合、大型であるがゆえに機敏な対応はしづらい。そのことを知っている地取連邦軍は、華団戦により火力不足を補う謀術戦を編みだしたのだ。



口径を抑えめにして速射性を高めた、地上軍MSの主兵器。この口径でも威力はザクのものに匹敵した。



一撃必殺を狙って  
開発された「威力は  
大きい」が、高価格が  
ネックとなり、少数  
生産に止まった



バルカン砲は胸部から腹部へと設置場所を変更され、広い射角をもつことになった。



独立したセンサーを備え、旋回式にして使い勝手を改善した対歩兵用兵器、威嚇や牽制にも使用する。胸甲中央に設置。

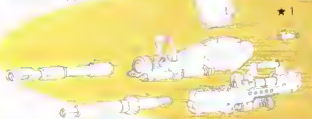


中・長距離兵装

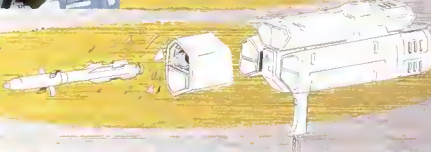
「マスキー」一粒が散り飛んだ空宙ではほとんど電気の故障さへ。データリングによる情報の共有と非同期行動の前提に置いていたこの計画は、間接的破壊に完全な非同期化に陥り、深刻な打撃を受けた。これは宇宙がでた、続く地球での戦いにおいても同様たつた。

あ5時の電撃も手落ちする。つまり電子機材による敵意の伝達を妨害するマスキー一粒子は、MSの意思に欠かせない。一方で機体の防衛もまた 敵意と電撃が困難になる（の）シナリオが倒壊し、同時に、さらに地球からの照準を歪められた。電撃が相手をさらに弱体化した空間に達していることは明々白々であり、戦術レベルでもたまたま、作戦レベルにおいても、自己の位置を暴露してしまうという致命的な結果を招いているのである。

結果、ミノフスキー粒子が散布されない、従来型の誘導兵器を用いた長距離戦闘が再び頻発することになった。シオン軍MSに比べ、連邦軍MSの兵器に中・長距離射撃をもつものが多いのは、確戦に続く、さらなる戦場環境の変化に対応しようとしたためなのだ。

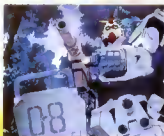


2発のミサイルが入った  
独立ブロックを、3基装備  
している。用尽した後  
は、ブロックを交換してミ  
サイルを補給する。



## 携行式シールド

取り付け角度を調整できる回転式のマウントで、前胴部に取り付けるマウント部にはスイング式のアームがあり、胴の先にシールドを突き出すこともできる。



シールドは先端を使つての打突攻撃や、マシンガンを固定させるための砲撃にも使える。



## 運輸機材

RX-79[G]の場合、拠点から長駆進出しての作戦行動も考慮されていたので、兵器と弾薬、そして物資を大量に収納可能な専用のコンテナが開発された。地上軍ならではの機材だ。



増数の兵装を換えて出陣することで、思  
ふ通りに戦況への制圧が実現した。



# RX-79[G] 陸戦型ガンダム

## 闘いの記録

暑さと湿気、そして境界を奪う緑のジャングル。陸戦型ガンダムが記された最前線のひとつは、MSにとってさえ過酷な東南アジアの戦場だった。終戦までの3ヵ月、この地で展開された激闘を追う。

### BATTLE CHRONOLOGY

宇宙世紀

0079年1月3日 一年戦争開始

4月1日 地球連邦軍、V作戦開始

8月18日 サイド7にて初回MS同士による激戦

10月 ジオン公国軍、  
アプサラス開発計画を決定

連邦地上軍、RX-79[G]を配備開始

■ 08MS小隊、ジオン公国軍の  
アプサラスIIと遭遇

連邦軍、アプサラス開発基地の  
探索を開始

アプサラスII、連邦軍第08MS小隊  
による待ち伏せ攻撃を受ける

11月7日 連邦軍、オデッサ作戦開始

連邦軍、アプサラス開発基地を発見

欧州からアジア地域にかけての  
ジオン艦隊が、激突へ向かう

30日 ジオン軍、連邦軍本部ジャブロー基地を  
攻撃するも、失敗

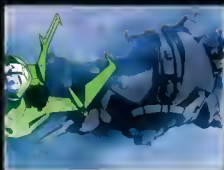
12月5日 連邦軍、アフリカ、北米にてジオン軍  
増田作戦を断絶

連邦軍の総攻撃中にアプサラスIIと  
ジオン軍、連邦軍ともに  
多数の犠牲の上に戦闘終了

24日 連邦軍、ソノモ宇留要塞  
攻陥作戦開始

31日 ジオン本拠地防衛ラインの要、  
ア・バオア・クー陥落

0080年1月1日 一年戦争終結



上空から襲い降りた。真形の機体、MSを思わせる車輪の輝きが、08小隊の軍心へ威圧する。

### BATTLE DOCUMENT 01

■ RECORD  
TIME: U.C.0079.10  
PLACE: 東南アジア戦場  
ENEMY: ジオン軍MS

東南アジア戦線では、連邦軍コマ大隊の第06、第08小隊に配備された陸戦型ガンダム。パイロットもまた充分な訓練を終えていたが、未だ重力に不慣れな者も多かった。08小隊隊長シロー・アマダ少尉も、初の地上戦でザクを深追いし、隊員とはぐれてしまう。

たった一機でジャングルを行くガンダム。視界が悪く、どこから敵が出てくるか分らないこの地では、機体の高性能もあてにはならない。幸運にも先に敵を発見したガンダムは、ジャングルに身を潜めて待ち伏せを敢行。必殺の瞬間まで引き付けての不意打ち攻撃で、どうにか勝利を収めた。

## 密林の戦い



巨体を緑の隅に隠し、好機を待つガンダム。密林に身を切られるような瞬間が過ぎる。

息詰まる心理戦



未だ気付かないザクを引き付けて攻撃！ 一瞬の判断が生死を分けた。

### BATTLE DOCUMENT 02

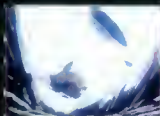
■ RECORD  
TIME: U.C.0079.10  
PLACE: 東南アジア戦場  
ENEMY: ジオン軍MAアプサラスII  
パイロットはアイア・サハリン

## 巨大MAの脅威

西部エリアでの作戦行動中、08小隊の面上に巨大な影がよぎる。それはジオンが開発中の新兵器、アプサラスの姿だった。圧倒的攻

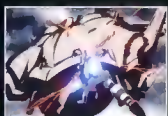
撃力に、苦戦を強いられる3機のガンダム。全滅の危機をまえに、サンダース軍曹機が決死の突撃を試み、突破口を開く！

ジオンの  
秘密兵器を  
迎撃せよ！



周囲すべてをなぎ倒す圧倒的な攻撃力が、08小隊を驚かす。

はサンダースのサハリン軍曹だ。



連戦攻撃で軍心もげ、幸くも撃退に成功。

RECORD

TIME: UC.0079.12

PLACE: ラジオ塔近海

ENEMY: ジオン軍MSグフ・カスタム

パイロットはノリス・バックカード

オペッサ作戦の勝利を受け、東南アジアの連邦軍も大規模な作戦を実行。遂に敵の秘密基地へと迫り、その攻撃を行おうとしていた。08小隊にも、拠点攻撃用のガンタンク3機を運搬する任務がエース。

だが敵のエース、ノリス・バックカード大佐は、自軍病院船の打ち上げを阻害から守るため、グフ・カスタムで単機で出撃。08小隊の両エース、カレンとサンダースをも手玉に取り、瞬く間に2機のガンタンクを血祭りにあげてしまった。残る1機を死守するために、シローのEz8は、最強の敵との一騎打ちに挑む！

無人の街で  
兵士の魂が激突する

# 鬼神、グフ・カスタム



基地近郊の市街地で、激しくぶつかり合う両軍。闇に交う爆弾がビルを、そして互いのシールドを削る。



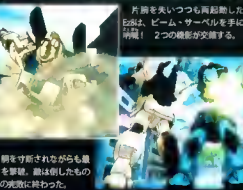
暴走突進の一面の隙をついて、ヒート・ワイヤーがEz8を捉えた！ 愚直で行動不器に陥ったEz8を、機体が食う。



片腕を失いつつも再起したEz8は、ビーム・サーベルを手に再戦！ 2つの機影が交錯する。



だがグフは、腕を寸断されたがらも最後のガンタンクを掌握。敵は倒したものの、戦いはEz8の死闘に終わった。



## PILOT

## シロー・アマタ

部下を想い、敵の命を惜しんだ“アマちゃん”隊長

陸戦型ガンダムを愛したエースたちのうち、わけても名を馳せたのは、東南アジア戦線コシノ大尉の第08小隊長、シロー・アマタ少尉だ。

サイド2出身の彼は一年戦争の間、連邦軍の海軍士官として参戦。作戦中友人を失った過去をもつ、それだけに、赴任当初はジオンへの憎悪を隠し、おり作戦中にも果敢な攻撃が目立っていた。ために敵陣に陥ることもあったものの、やがて卓越したセンスで高い技量を獲得。エースの名に似した戦いを残すようになる。

だが戦いのなか、アプサラスを率える敵パイロット、アイナ・サハリンと心を通じた彼は、やがて自身の憎悪と戦争の意義に疑問を抱くようになる。もともと部下の命を第一に考え、古参隊員に“アマちゃん”と敬称されるほど優しい心持の持ち主だった彼は、やがて敵兵の命守ら守らうとするようになり、最後は愛するアイナとともに、愚かな戦争に背を向けて涙を流す。出陣の消息はとうとう知られない。

無論、その選択は軍人としてあるまじきものではあるが、不器量なことに部下たちは、それでも「隊長」の決断を認める。戦術や能力ではなく、寛大な心と若年として部下の命を賭け勝ち取った“アマちゃん”の理想主義を慕う者は、もはやとりもたないたのである。



### PROFILE

・シロー 鬼と名のつくようになった、アイランド・メロ島出身の13歳。鬼神の人間的能力で、ゲリラ戦も地方につける敵の大きさを引いた。



・シロー率いる08小隊のMSはパイロット、カレン・ジャン・バグワースとテリヤ・サンダース。彼らもまた、陸戦型ガンダムを率えるエースである。

## THE RIVAL

種族のガンダムタイプを手玉に取るほどの強さを見せた、強敵たち。

## MS-07B-3 グフ・カスタム

### SPEC

総高18.3m  
全長18.3m  
全幅18.3m  
全重量72.5t  
推進力1,600馬力  
燃料タンク容量4,000kg  
センサー有効半径3,600m  
装甲材質/鋼製スチール合金  
武装/ビーム・リフレクター  
ヒート・サード  
ガンダム・シールド  
3連装ガトリング砲  
腕部搭載アサルトガン  
バリエーション増加可能



白兵戦用に開発されたMS-07B グフは、より柔軟な運用を目指して改修した機体。遠距離射撃戦用のガンダム・シールドをはじめ豊富なオプションを備えるが、防御力の低下などによって使いは難しくなっている。

## アプサラス

ジオン軍が開発したM.A. ミノフスキー・クラウドでの高高度・高速飛行能力による、連邦軍ジャブロー本軍への直接攻撃を目的としていた。東南アジアでテスト中であり、開発段階に応じてアプサラス1号機までは山を飛ぶ能力のメガカノンで連邦軍主力を撃滅させたが、Ez8の機体の攻撃によって破壊された。



アニメ以外のメディアで生まれたガンダムたちを紹介するこのコーナー。今回は多様に発展した『SDガンダム』シリーズの主要作品から、主なキャラたちを追ってみた。

## 新SD戦国伝 伝説の大將軍編



地上最強編 から1年後の実況を舞台にして、第5作「光の力」の化身である結晶龍皇のおおげの「光の力」の力を得た武勇の戦士、名を光龍皇と改め、新たな力を得た光と仲間たちによる「光の力」との戦いを描く。

結晶龍皇によって選ばれ、光龍皇の力を得た武勇の戦士、名を光龍皇と改め、新たな力を得た光と仲間たちによる「光の力」との戦いを描く。



## 新SD戦国伝 七人の超將軍編



前作から10年後の世界を舞台にして、第6作「新SD大將軍の戦い」武者龍皇と次男の龍皇たちから、巨大な天の星の落下で、天宮の神の危機、立ち向かうSD大將軍は、7人の「光」の力を持つ武者たち。

新SD大將軍の戦い、武者龍皇と次男の龍皇たちから、巨大な天の星の落下で、天宮の神の危機、立ち向かうSD大將軍は、7人の「光」の力を持つ武者たち。



## 新SD戦国伝 超機動大將軍



お家騒動の騒動、武者龍皇と次男の龍皇たちから、巨大な天の星の落下で、天宮の神の危機、立ち向かうSD大將軍は、7人の「光」の力を持つ武者たち。

新SD大將軍の戦い、武者龍皇と次男の龍皇たちから、巨大な天の星の落下で、天宮の神の危機、立ち向かうSD大將軍は、7人の「光」の力を持つ武者たち。



## 超SD戦国伝 武神輝羅鋼



超機動大將軍 から15年後、百鬼夜行軍が台頭し、再び乱れた天宮を舞台にして、第7作「武神輝羅鋼」武者龍皇と次男の龍皇たちから、巨大な天の星の落下で、天宮の神の危機、立ち向かうSD大將軍は、7人の「光」の力を持つ武者たち。

武神輝羅鋼の戦い、武者龍皇と次男の龍皇たちから、巨大な天の星の落下で、天宮の神の危機、立ち向かうSD大將軍は、7人の「光」の力を持つ武者たち。



## 超SD戦国伝 轟轟大將軍



武神輝羅鋼 から10年後を舞台にして、第8作「轟轟大將軍」武者龍皇と次男の龍皇たちから、巨大な天の星の落下で、天宮の神の危機、立ち向かうSD大將軍は、7人の「光」の力を持つ武者たち。

轟轟大將軍の戦い、武者龍皇と次男の龍皇たちから、巨大な天の星の落下で、天宮の神の危機、立ち向かうSD大將軍は、7人の「光」の力を持つ武者たち。



## 新SD戦国伝 天星七人衆



作品の舞台を、結晶龍皇の力によって、再び乱れた天宮を舞台にして、第9作「天星七人衆」武者龍皇と次男の龍皇たちから、巨大な天の星の落下で、天宮の神の危機、立ち向かうSD大將軍は、7人の「光」の力を持つ武者たち。

天星七人衆の戦い、武者龍皇と次男の龍皇たちから、巨大な天の星の落下で、天宮の神の危機、立ち向かうSD大將軍は、7人の「光」の力を持つ武者たち。



## 『SDコマンド戦記』シリーズ

ミリタリーテイストをSDガンダム。の世界に取り入れたのがSDコマンド戦記。マゼラン人陸軍部隊の結成部隊G.A.R.M.S.の面影が、90年より玩具や漫画を中心に展開された。



シリーズを通しての主なG.A.R.M.S.の面影が、90年より玩具や漫画を中心に展開された。



シリーズを通しての主なG.A.R.M.S.の面影が、90年より玩具や漫画を中心に展開された。



シリーズを通しての主なG.A.R.M.S.の面影が、90年より玩具や漫画を中心に展開された。

## その他の『SDガンダム』シリーズについて



武者丸



黒龍

シリーズを通しての主なG.A.R.M.S.の面影が、90年より玩具や漫画を中心に展開された。

シリーズを通しての主なG.A.R.M.S.の面影が、90年より玩具や漫画を中心に展開された。



いきなり急展開! あの最凶ライバルが帰ってきた!

メカデザイン&イラスト

やまと虹一

原案 クラフト団

# ガンダム狂四郎

作監ナンバー2 サイコ・ジオング



「ミニモレション、ゴー!」久しぶりのフラッシュメモリーターで、志士ガンダムを自在に操る狂四郎。「さすがに俺のフラッシュメモリー、むっ、なんたまたの機体は!」「いそミニスター狂四郎!」聞き覚えのある声が響く。「くっ!」不意打された狂四郎の運命やいかに!?

ネット回線に乗っ取って  
フラッシュメモリーに  
侵入したんじやろ

サイキークー……  
サイコ・ジオングのフレイヤーは  
やつたのか?!

クラフトマン・マスー

京四郎 (39)

サイコ・ジオング 作 サッキー・竹田 (4回) フルスラッシュ

サッキー・竹田が「パーフェクト・ジオング」を超えるべく、30年かけて作り上げた究極のガンダム。ボディはパーフェクト・ジオングで、頭はジオングとサイコ・ガンダムのハイブリッド。右手の機はパーフェクト・ジオングの剣をパワーアップしたもの。志士ガンダムが144分の1サイズなのに対し、サイキークーの金に糸目をつけないフルスラッシュの結果、60分の1サイズという、若干反則といえるスケールになってしまった

ミスター狂四郎  
カンフラ30周年を  
記念して……  
フレイヤーを  
楽しもうではないか!

志士ガンダム

謎の仲間





イラスト 井一

## 第2回 最強の機体を求めて

### オーガスタのガンダム

ハルマイトを外すと、長い髪が伸び、はらりと落ちた

速すぎて怖いくらい

機体の重心地を技師に問われたテスト・パイロットの評価は良かった

この機体の操縦系は従来のものとまったく異なる。コクピットには、パイロットの視点からそのままMSの視点であるかのような表示を行う。全周囲型モニター。パイロットの操縦に早く見込られるよう、関節の駆動部に施された、マクネル・コーティング。敏感すぎる。とそのテスト・パイロットは感じていた。果たして実現で使えるものか。とパイロットの腕次第でどこかな

そのような技術の、彼にパイロットは不慣れな意を覚えたものが、自分ではこの機体を使いこなせないという意味かと詰問した

実際のところ、テスト結果は芳しいものではなかった。反応速度と1%の相対誤差が1割増えたにもかかわらず、30%程度に留まっていた。しかも、こ

の機体を調整する技師たちにしてみれば、予想できる結果ではあった

これはニュータイプ専用機だ。あなたの体は認めるか、ちいとはかりながら勝ちすぎる

彼は、この機体を操縦するのは一種の対物だ。とまで言った

テスト・パイロットを務めたクリスティーナ・マッケネルは中間は背後を仰いだ。テストは実際に機体を稼働させてのものではない。機体の頭部を胴体から切り離した状態で行うシミュレーションだった。彼女の視線の先には、顔、かおった

人間を思わせる。顔、はやくはにやかし、垂れ下がる無数のケーブルが引き切られた神経を連想させる

この機体、RX-78NT-1アレックスの開発が始まったのは、1997年8月、北米オースタス基地においていた。オーガスタ基地には131のメンタルヘルスを研究する部署が置かれ、研究の端としてニュータイプ概念の検証が行われていた。RX-78NT-1の開発拠点とされたのは、このためだという

地球連邦軍のニュータイプ研究は、オランダ国鹿耳人村に遊れており、オランダ国軍のようには、ニュータイプの思考により機体を操縦する「サイリミ」のような技術の開発は不可能だった。そこで開発陣は高い機体応答性によって、ニュータイプ・パイロットの能力を引き出す方向をたてた

たとえば、ホワイトベース。降でのRX-78NT-1運用データは、かなり早い段階で、この機体からパイロット・アムロ・レイの反応速度に相当できる。なることを確認したという。これを受け、開発陣は教育型コンピュータを改良、より高速な演算処理を実現した「NIC」システムを完成。また、機体そのものの運動性を向上させるべく「マクネル・コーティング」の技術を確認した。これらの仕様はガンダム1号機において試験的に導入され、RX-78NT-1には用いられている

駆動系にはマクネル・コーティングが施された運動性の向上によるパイロットの負荷を軽減させる。コクピットにはリア・シートや全周囲型モニターが採用された。リア・シートは脱出用カプセルとしても機能することから、コア・プロセッ

システムは廃された。

パイロットの視点をそのままMSの眼とする全人周回型モーターは、オーガスタ基地でニュータイプのパイロットに最適な仕様として案考され、ケベックオデックス社の協働によって完成したといわれる<sup>501</sup>

オーガスタ基地が北米にあったことから、RX-78NT-1のこうした独自仕様の開発には、RCGM 79 システム系機体の OEM 生産を計けついでた地元周辺の企業名が多く見受けられる。

基本設計は、RX-79[G]降戦型ガンダムを、RX-78 のサイド7でのトライアル・データを基に再設計したものとみられる。RX-78NT-1 が脚部に大容量のプロペラント・タンクを持ち、脚部ユニットをスラスター化したのはこのためだといわれ<sup>502</sup>

開発陣がこのような仕様を採用した背景には、RX-78NT-1 が防御力向上のため、追加装甲の装備が早い段階から決定されていた点がある<sup>503</sup>

また、RX-78 同様、パーツの品質管理が厳しかったため、RX-78NT-1 には大量の余剰パーツが発生した。戦後、これらのパーツはRCGM 79 の高級機のため使用され、RCGM 79N ジム・カスタムが開発されることになる。RCGM 79N はこのような系譜から「オーガスタス」と呼ばれる。

本機は地球連邦軍最新期のニュータイプ機として位置づけられるが、ニュータイプのパイロット、アムロ・レイへ引き渡される以前にジオン公国軍と交戦、破壊された（一説によれば、この時点でRX-78NT-1 は操縦者の不適合のため、RCGM 79 以下の性能が低下できなかったものの存在）。

しかし、開発史上における本機の特徴は大きい。'80年代半ばの主力量産機で採用される技術の幾つかが、未熟な状態ではあったものの、すでにこの機体に盛り込まれていたのだ。

## FSWS計画という空論

「年戦中期に完成したRX-78は、当時としては群を抜く性能を有する機体であった。もっとも、大戦に投入されてみると幾つかの問題点が明らかになった。

RX-78はコア・ブロック・システムを採用したこ

とで胴体部分が脆弱なうえ、人体の動きを再現するため、関節部分の多くが露出していた。

開発陣はこれらRX-78の「弱點」解消を模索し、年戦後期に強化パーツとしてGパーツを完成したといわれ<sup>505</sup>

G パーツはRX-78を上半身のユニットであるAパーツ、コア・ファイターより変形したコア・ブロック、トナリ身ユニットであるBパーツの結合体となし、新たにGパーツAとGパーツBを組み合わせたことで機能拡張を1階とするものだった。運用方法としては、長距離重撃機体のGアーマー、支援用重戦機体のGファイター、撃破後の戦闘機Gスカイ、支援用重戦車のGブルといった形態が挙げられる。

Gパーツの運用は、RX-78の防御力、攻撃力を強化するだけではなく、移動力をも高めた。

MSとしての移動力の低さは、開発段階より問題視されており、このことが母艦である ホワイトベース、との有機的運用の提案へと繋がっていた。さらに、重力下において作戦域まで母艦が移動できない場合には、輸送機としてガンダムが用意されていた。

しかし、ガンバリーの弾力性や攻撃力の低さ、移動速度の遅さは、MS運用上の機動性を劇的に改善するものではなかった。GパーツはRX-78を内包するGアーマー、GパーツA・Bのみで構成され、上部にRX-78を格納可能なGファイターとして運用されることでこれらの問題を解決することができた<sup>506</sup>

Gパーツは分離体によってRX-78をサポートするといわれ、前掲的な発想のものとして開発された。しかし、現実には作戦遂行地点でパーツを組み替えることが難しく、運用において課題を残した。

こうした結果に鑑み、開発陣はフルアーマー・オペレーションを提案することとなった。

RX-78 せもの装甲パーツを付加し、防御力向上させるというものである。これは簡易装着型と呼称される方式で、RCG 80 ジム・キャノンの脚部にも採用されている

とされ、装甲の追加は機体重量の増加を意味し、必然的に運動性の低下を招くこととなった。この点

を解消すべく、開発陣は増加装甲へ補助推進装置を設けるという発想の転換を行う。

さらに、当時、連邦軍内にはアムロ・レイ機の絶大な戦果を受け、少数精鋭のMS部隊をRX-78で編制、単機で戦艦に匹敵する攻撃力を持たせる構想が存在していた。開発陣はフルアーマー・オペレーションにより、この構想を実現すべく、増加装甲へ固定兵器を組み込むという、攻防一体の「真」を計画した。

この計画はFSWS計画と呼称された。FSWSは Full armour System and Weapon System の略称といわれる。計画の発動は「年戦後期から末期にかけてと見られている（年戦後期は最高機密事項として一切の情報が秘匿されており、計画の一端が明かされたのは終戦後1年を経てであった）。

同計画において、開発陣はFA-78-1フルアーマーガンダムを完成したとされる。FA-78-1の姿は、年戦終結の1年後に刊行された、連邦軍の戦術記念誌録載で確認できる。ただし、ここに掲載されている写真はコンピュータのシミュレーション映像にすぎず、実機は存在しないという意見が強い。

実質のころ、FA-78-1に純く型式番号の機体の開発が進められたのはものの、いずれも計画のみで頓挫している

FA-78-2はヘビー・ガンダムの名称で呼ばれる。簡易装着型の追加装甲を採用したことで、FA-78-1の重量は肥大化することとなった。そこで、FA-78-2は各部を改造、あるいは新設計として、直接重装甲機とした。これによりFA-78の2倍重量はFA-78-1よりも軽減されていた。もっとも、この重装甲でもあり、運動機性の低下はきわんともし難いのであり、専用機として中型戦闘機型機ガンキャリーが提案されたという。

こうした問題点を踏まえ、続くFA-78-3フルアーマー-3号機では、「当初から増加装甲の設置を考慮した設計をする」となった。

ベースとなったRX-78-7ガンダム7号機は増加装甲設置用のマウント・ラッチを各所に設置、重量の増加に対応すべく余裕のあるスラスター推力を付

\*01 リニア・シートの完成にはアナハイム・エレクトロニクス社の協力があったといわれる同社社長、フジオ・イ・カバシヨウらら0079年11月18日、記者会見においてリニアシート・システムをアナハイム社に紹介し、この証言を主張する。ただし、会見で示されたのはリニア・シートのシミュレーションです。全米周回型ニュータイプ開発のものであった「全米周回型モーターの完成を要望する」と認められる

\*02 RX-78の脚部にある「ふくらみ」状の影からは、影の内部に金属疲労の可能性が考えられる。歴史上の下の重量を軽減させるために行われたことと関係している。しかし、実機データでは金属疲労が予想を大幅に下回っており、RX-78NT-1の脚部ユニットをスラスター化する仕様が採用されたこととなった。もっとも、こうした大威力は通常の機体には不要と見なされ、そ

の他、しばらくの間、連邦軍のMSに採用されることはなかった。ちなみに、熱戦中に出たのは従来のより脚部動力と安定性を高めるためである。RX-78NT-1は他のRX-78系の機体同様、大気圏内では空力による制御を行うが、吸排気口を二重構造にした複合インテーク・ダクトの採用により、こうした空気を安定したものである。もっとも、当初、ドクト部分はこの仕様であったこともない。連邦軍における最小気圧環境の技術が次第に成熟していったが、こうした変更が採用されたことと見られている（この仕様は、連邦機としては戦後、RCGM-79N ジム・カスタム採用された）

\*03 RX-78NT-1はガンダムの重量を想定した足跡跡への側面を持っていたといわれるガンダムの重量設計は「RX-81計画」といわれ

ガンダムの格闘性能を向上させた■重機として位置づけられていた。RX-78NT-1には追加装甲が採用され、腕部はカトリッド・ガンが内蔵されたもの、RX-81腕部のためたまたまRX-78NT-1に採用されたパーツの多くは、その機体の間に干渉を発生していた。しかし、そのパーツには後の機体で採用される規格の多くが受け入れられることになった。RX-78NT-1はガンダムの重量比を標準として開発されたといわれている

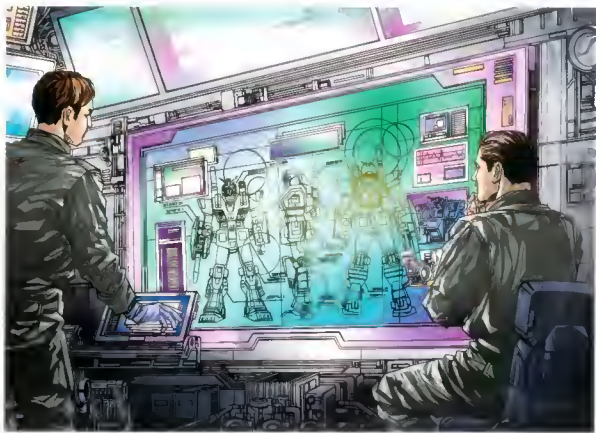
\*04 この点は公国軍側の分析においても早い段階から判明していた。サイド7での戦闘の際、ハイウェイ・ブレイク（降参されたシャア・アズナブル少佐（当時）は、部下へRX-78の脚部を狙うよう指示したという

\*05 コア・ブロック・システム採用が決定され

た時点で考案されたとする説、サイド7でのトライアル終了時に開発に着手した、2ヵ月にも満たない期間で完成したとする説がある。

\*06 量力下におけるMSの移動力の強化という問題はこの時期、公国軍においても重視されていた。MS-06 グラウ・タイプIIに代替したMS-07 グラウは重装甲型・タイプIIに上乗せするといった運用がなされた。RX-78の飛行を補助する機体はサブ・フライト・システムと見られる

Gファイター同様、RX-78のパーツを含まない予備のGコア・ファイターとGパーツBを組み合わせたGスカイ・ブレイクは、RX-78を置き換えた状態で飛行可能であり、重装甲のサブ・フライト・システムとして機能する



えられた。ここへ増加装甲を追加し、FA 78.3とするわらいたった。

この計画において画期的と評されるのは、このFA 78-3ヘセカンド・アーマーを装着するというアイデアである。セカンド・アーマー装着時の機体はHF-A-78 重装フルアーマー、ガンダムと呼称され、戦艦クラスの火力とMAに匹敵する装甲を持たせるよう、構想されていた。<sup>107</sup>

HFA 78 3 は、ベース機である RX 78 7 の基本フレームが製作された時点で終戦を迎えたといわれるが、たとえ、計画が進行していたとしても、当時の技術力では実現不可能な、相1の空想であったMSを戦艦に化裁する戦力という、軍部からの要求は、あまりにも高いハードだった。開発陣は実現の可能性をいったん棚上げしても、ここに見える機体の開発案を掘り下げなければならなかった。

F S W S計画実施時の実質的な成果として、今日、我々が存在を把握できるのは、RX 78NT-1の追加装甲のみである。チョバム・アーマーと呼ばれるこの装具は、FA 78-1の試験案を受けて開発されたという（追加装甲は機動性を低くさせることから、腕部ガタリング・ガンとともに、機体をアムロ・レイへ引き渡す段階では外される予定であったという）。

一年戦争期において防御力と攻撃力を同時に高める手段は少なかった。ソオン公国軍がヒーム・ハリアとして実用化に成功した「フィールド・シネレーターの技術にしても、終戦後、研究施設の接収によって、ようやく地球連邦軍にもたらされたのだ。

## アナハイム・エレクトロニクス社の台頭

連印車は探偵機である。サンタムを完成していたが、兵器として研ぎすましてもらいに米国のMS技術と、兵隊においては大きく遅れていた。連印車の勝利は軍用機RCM 79の性能ではなく、物性によって成し遂げられたことだ。公明社の研究施設、開設地から得た技術資料によって、開発されたのは公明社の技術的先見性を叫びのたりにすることになった（フィールドン・ドキュメント）サリフはコンピュータという技術は、こうしたなかで世界にもたらされた。とりわけ、公明車で進んでいたニュータイプ研究は、連印車内部で強大人間研究へと発展していきことになる。

連邦車は量産、運用までも視野に入れたMSの統合技術を開発すべく、公明車の技術を吸収する必要があった。

2008年9月11日の終戦時にはシオン公国は共和政体へと移行、シオン共和国となっていた。終戦協定後に結ばれたグラナダ条約には、シオン共和国の軍事的無力化に、及した項目があった。地球連邦政府はこれに基づき、合同軍を支えた軍需産業についても、戦後、早い段階で解体する方針を採った。特に、MSの購入である資金を潤したZEOINC社の解体には細心の注意が払われた。

地球連邦政府は ZEONIC 社の解体を、アナハイム・エレクトロニクス（以下 AE）社への吸収合併

「肝で行った。これは行政指導以上の力を持っており、旧 ZEONIC 社の技術者たちはほぼ強制的に引継がせられることとなった。A 社には彼らの受け入れ先として、月面のフォン・ブラウン市郊外に RS 09 トラムを開発した ZIMMAD 社の技術者たちも多くが A 社に移るのだからこととなった」

A社とは、一戦半以前から知られる、1人企業である。人はコロニー建設から、小売家電の製造まで扱う総合企業であり、最大の収益部門は家電製品の開発・生産であった。本社は地味に構えていたが、投資先は1行半に中心としており、多額の研究施設、工場、拠点を巨額の借入で買占めスベス、コロニーに持つ戦術上と連邦の兵器工業1部ではトップを占めていたとすれば、その規模の1人企業は想像できよう。一戦半勃発後においても、その財力力の大きさから、国がA社の接収を控えたほどの企業である。

もともと、連邦軍のMS開発への貢献度はその規模に比例して、決して高くはない。一戦戦時、A E 社のMS開発における「主たる」業績は、RCM 79 月のチーム・ライオンをプラットフォームと提唱して開発したことや、RCM 79 を OEM 7 年した程度である。これは、A E 社の 1 番重要な供材が連邦軍であり、連邦軍のMS開発の遅れがそのまま 社内技術の育みの不足に繋がった結果であるといわれている。

A E 社は ZEONIC 社を吸収合併することによって積極的に立ち見られていたが、これはMS開発・量産の技術を得たというより、国内の誇りにあった MS-

FA-78は1機で「連邦軍作戦」の要を掌握する「ステム」であつたと思ふこともできる。連邦軍としてはこのよきものの存在だけで、HFA-78の1機で最大出力の「スタ」を用い、1戦艦1機、戦艦2機のロ・ヘレン・メダラ戦艦による長距離砲撃を制しに攻撃を行

作戦部隊連「セ」を指揮。FA-78の1機で連邦軍を、セ・コ・ア・マーを装備した場合、この「用」の追加保障の用からFA-78はヒーム・キーンを装備できない。フ・スト・アマーを指揮しRX-78-7となつて格闘戦を行う。主眼はヒーム・ライフルとヒーム・サ・バールとなる。

「OS」はヒーム発射機「カ・ダム」開発計画に力を入れた。軍の指揮に基づき、試作0号機を完成させて、一年戦争時に開発された支援機「ア・コースター」の機動力に着目して開発。ア・コースターをコア・ブースターとして機体1機にキック可能なものとしたのが長距離「ム・ライフル」MPWS「ミノス」粒子子弾頭装置など。本機にはさまざ

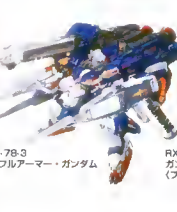
な家族的仕様が盛り込まれた。この「セ・ム」開発を与えられたこの機体は、増設任務での試験運用中、旧連邦軍の残党に遭遇。戦艦となり大破。多機能化した機体はバトロ・ヘの負担が大きいとの判断から、A社が開発した戦艦7機の指揮を司る機体は不可能であるため、戦艦戦術化し、1層以降の増設は開発された。



RX-78-7  
ガンダム7号機



FA-78-3  
フルアーマー-3号機



HFA-78-3  
重武装フルアーマー-3号機



RX-78GP00  
ガンダム試作0号機  
(プロトタイプ)

兵器の登場は、新たな兵器市場の誕生を意味していたのだ。

そうしたなかにおいてA社社はRCM79用ビーム・ライフルの開発において提供していたブラッシュ社を傘下に収めたばかりか、ヒーム・サ・バールの実用化に尽力したボウワ社、RX-78NT1の開発に関わり、RCM79のOEM生産を行っていたケバック・オン・テック、コロラドサーボ、ノブ・オーク産業といった企業までも吞み込んでいた。さらに、MSの出現によって高度戦闘機の受け皿である軽戦闘機に陥っていた航空機メーカーの名門、ハービック社までも傘下に収めていく。ZEONIC社の戦艦開発は、この総力1つとともいえる企業行動だった。

わずか1年ほどの間に、A社は地球圏最大規模のMS開発と生産施設を擁する企業となった。旧公明社の軍事関連企業が解体されたことで、実質的に、MSを開発かつ量産まで可能な企業はA社のみになっていった。

## ガンダム開発計画

一年戦争の終結がそのまゝ、過去1数年にわたる軍拡時代の終局に繋がることになった。公明社という戦艦製造の巨頭が偏った企業増強は、すでに軍用複合体と利権構造を生み出して、軍部には軍事予算の削減がそのまま政治的影響力の低下に繋がることを考える者も多かった。

彼らは「一年戦争で決着した連邦の軍事力再建の必要性を強く説き、議会に承認させることに成功する。1年戦争終結後、1年以上が経過した0081年10月に地球連邦議会が可決された「連邦軍再建計画」である。

戦艦戦術部隊結成も、これを認める。組織的な抵抗運動を続ける旧公明社勢力はアメリカや暗黒都市域を中心に存在していた。加えて、アステロイドベルトの小惑星帯地帯アクセル連れた勢力の存在も

増されていた。軍部の主眼を議会が奪ったのは、こうした情勢を鑑みてのものだった。

連邦軍再建計画のもと、ジョン・コウエン中尉はガンダム開発計画を遂行する。試作機として新たなガンダムを開発、技術的成果を量産機へとフィードバックすることで、MSの高性能化を図るという計画である。

「軍はこの計画を民間企業との共同開発として進めることとした」

民間企業との共同開発という方針が採られた背景には、連邦軍内に内部で独自に開発するものはない、技術に限りがないという自信があったという。例えば、旧公明社が得た、サイコミュをはじめとするニュータイプ関連技術は軍事機密として秘匿し、専断の研究施設を設ける形で独自開発が行われていた。戦術技術の開発に伴う技術転用、流通を民間のものに開放させることは、機密の保持からいって絶対にあった。しかし、軍の所有する施設での開発はコストがかかりすぎる点も問題視されていた。人規模な設備という方針こそ選ばなかったものの、戦後の財政状況からすれば、作戦ほどの予算規模は許容し難いものであった。従来の技術を基に新機開発を行うならば、民間企業を起用し、量産にあたっては外部の企業へ依頼するべきであるというのが、この時代における判断であった。

反面、新兵器であるMSの技術が民間企業へ開放していくことを連邦軍は恐れていた。連邦政府は民間で開発されるMSについて厳しい規制を設け、許認可権によって開発企業を統制下に置くことを行なった。軍用MSの共同開発においては、一年戦争時にMS生産に協力した企業が優先された。1説には、選定された共同開発企業は政府の許可認可権によって半親半官の枠を確保されており、事実上、拒否することはできなかったといわれる。

連邦軍は新規ガンダム開発のパートナーとし

て、A社社に自弱の欠を存した。前述の通り、A社はMS関連企業の吸収合併を繰り返していた。軍が高性能MSを開発するにあたって、パートナーたる技術力と生産規模を持つ企業は、この会社をおいてほかになかった。

ガンダム開発計画は従来技術に1歩とすることはあったが、この時点において、連邦軍は自ら手探りで開発していったMS技術のみならず、旧公明社の技術的成果をも獲得していた。ただし、両者の技術の融合は完全ではなかった。この計画は従来技術とはいながらも、連邦軍と旧公明社の技術を融合、発展させることが求められていたのだ。

そうした経緯もあって、軍は選定を提示するだけで、事実上、開発はA社社主導で行われた。

軍の与えた指標は、きわめて機能的なものであった。1機2機の機動兵器、必要な機能すべてを持つ兵器。こうした要求にA社社開発が順応を惜まなかったことは想像に難くない。

彼らは「一年戦争時に開発されたMSを大別し、想定される運用領域に応じて複数の試案を提出することにした。軍はこの方針を承認、結果的に運用用途の異なる1号機から4号機までの開発が同時に進んだ」。

こうした規模の開発を実質的に単独で行い得たのも、A社社が地球圏最大の企業であり、傘下に擁する技術者の数においても比類するものない規模を誇ったからであった。

試作機の完成、量産機の生産計画の成否はA社社によるMS市場の独占につながる。計画に関わる者、誰もがそのように考えていた。だが、ひとつの事件がA社社を連邦軍のMS開発の最前線から遠ざけた。

開発された試作機のうち、2機までが旧公明社開発、デラーム・フリーの手にわたり、実戦で使用されるといふ事件が起きたというのだ。



# GUNPLAガンプラ30年の歩み

## Revelations



### 第2 MGの登場から始まった 第2次ガンプラブーム

#### ユーザーの要望に応えた ガンプラの登場

ガンプラは、誕生10周年時にリリースされたHGシリーズは、当時の最新技術を用いて「手軽に満足度の高い1/144スケールの下位機ガンダムを手にすることが出来るシリーズとして導入された。以後、手軽に作ることが出来るという商品の考え方は通常商品にも波及し、ガンプラユーザーの拡大に繋がることになる。

その反面、従来からのユーザーからは、簡単に作れるガンプラは作りたくない、大人が楽しめるガンプラが欲しいという欲求が現れはじめていた。

そうした状況を受けて、'94年に「ホビージャパン」が主催したイベント「JAF・CON III」の会場では、ハンタイの川口克己氏とプロモデラーのMAX義道氏による「究極のガンプラを考える」というテーマのトークショーが行われ、現在のユーザーが求めるガンプラ像が模索された。そして、'95年のガンプラは誕生15周年に向けて、ガンプラのリファイン企画が決定することになる。

ガンプラの新シリーズでは、今までキット化されているMSを最新技術で再キット化することを前提に、HGシリーズとの差別化とスケールモデ

カンプラブームの始まりから15年後、初期ガンプラファンの回復をうながす、大きな波が押し寄せた。第2次ガンプラブームの起点にして、ホビー業界の台風の目となった「MG」の、誕生の背景を振り返る。

文：石井 誠

ル的なディテールや解釈をより精密に再現するために、1/100スケールとなることになった。

各部の可動方式の見直しや、パーツ分割による色分けの再現、スナップフィットの導入。そしてMSへの新たな解釈などが盛り込まれていくことになる。さらに「ホビージャパン」誌での「究極のガンプラを作る」という連載企画と連動し、ユーザーの声を取り入れながら商品化が図られていく。その新たなガンプラのラインは、MGというシリーズ名に決定し、第1弾アイテムとなるガンダムが、'95年7月19日にリリースされた。

#### 究極のガンプラとして実現した 完全変形ギミック

その後MGは、HGシリーズにおいてキット化希望第1位でありながらも実現できなかった、サクレビを第2弾として発売。ガンダム系のMSのみを商品化したHGシリーズとは異なるラインであることを、強く印象付けた。

そしてMGはシリーズ第3弾にして、新たなトライアルを行う。それは、完全変形のZガンダムのキット化であった。

アニメ放送当時の1/100スケールでHGでも変形するZガンダムはリリースされていたが、MSとウェイブライダー、両形態におけるプロポーションの両方を成し遂げてはいなかった。

そこでMGでは、カトキハジメ氏をデザイナーとして起用し、変形の機構や形状を統一、求められていた完全変形と、MS、WR両形態でのプロポー

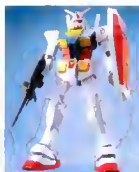
ーションの両方を実現させ、'96年にリリースされる

#### 内部フレームの確立による さらなるMGの広がり

'97年発売となったガンダム試作1号機では、通常形態とフルバニーアン形態の2種類のキットをリリースするにあたって、内部フレーム構造に装甲パーツを取り付ける方式を採用。フレームと外装を分けることで、機体の可動性と表現性が格段にアップし、以降この方式はMGのスタンダードとなっていった。

'98年になると、さらなるMGのバリエーション展開の可能性を示す、ガンダムNT1が登場。このキットは、フレームや、海外装甲パーツを共用することで、シム・カスタムやシム・クウエルといったバリエーション機の展開を可能とするデザインや設計が行われた。この方式には、一部金型の流用によってキットの開発費を抑えつつ、バリエーションが増やせるというメリットがあり、MGのもうひとつの技術的スタートとなった。

こうして、シリーズ開始当初からユーザーの要望に応えながらスタートしたMGは、ガンプラの歴史の中で最大のラインナップを誇るシリーズとなり、誕生から15年の年月を経た現在でも、新製品を生み出し続けているのである。



**MG RX-78-2  
ガンダム**

95年7月発売

もし本当にMSが存在したら、という視点でメカとしてのガンダムを見直し、スケールモデル的な演出を加えた大人が楽しめるガンプラとして、従来ファンからの大きな支持を得た。



**MG MS-06F/J  
ザクII**

95年11月発売

ガンダム以上にキット化を望まれていたザクII。精密なディテールをもち、地上用と宇宙用を選択式で作ることができると、スケールモデル的なアプローチが評価された。



**MG MSZ-006  
Zガンダム**

96年4月発売

カトキハジメ氏が加わることで、ギミックやプロポーションが再検討され、完全変形も実現。そのスタイルは、これ以後のMGのデザインにのぞ



差し替えるなどの変形を可能とし、射撃機的なプロポーションを再現したWR形態。その完成度はMGの評価を高めることにつながった。

**MG  
RX-78GP01  
ガンダム試作1号機**

97年9月発売

初の内部フレーム構造を採用したキット。内部フレームに外装を繋げる手法によって作りやすく可動範囲も広がり、MGの方向性を確立した。



**MG RX-78NT-1  
ガンダム NT-1**

98年10月発売

バリエーション展開を促した基本設計とフレーム構造を採用。共通して外装を要素でバリエーションを強化していくというMGの流れを作った。





# GUNDAM MS HISTORICA

全6冊予定 各巻定価 690 円 (税込) A4 判縦装  
角切 中込し オイルカラー 36 ページ

特集

## 次号 Vol.3 高みへの飛翔 7月24日発売 — 飛行型ガンダム

MSの限界を超えて、宇宙を、そして大空を自在に飛行する。新たな次元への飛躍を可能とする翼を持ったガンダムたちを、徹底的に紹介！  
紹介機種 ▶ MSZ-006 ズガンダム LM314V21 V2ガンダム

好評発売中!

Vol.1 白の伝説  
— 初代ガンダム



紹介機種 RX-78-2 ガンダム

Vol.4 8月24日発売予定

驚異の鬼神  
— ニュータイプ専用ガンダム



紹介機種  
RX-93 ヲガンダム  
RX-78NT-1 アレックス  
MRX-009 サイコ・ガンダム  
MRX-010 サイコ・ガンダム 試作機

Vol.5 9月24日発売予定

宇宙を震わせる  
脅威 — 重量級ガンダム



紹介機種  
MSZ-010 ズガンダム  
RX-78GP01 ガンダム試作1号機  
RX-78GP02A ガンダム試作2号機  
RX-78GP03 ガンダム試作3号機

Vol.6 10月23日発売予定

Gを超え、  
先へと進むもの  
— 進化系ガンダム



紹介機種  
RX-0 ユニコーンガンダム  
F91 ガンダム F91  
LM312V04 Vガンダム

Contents

伝説への道	104
その後の伝説、続編の歴史	105
RX-78-1 (GUNDAM) の誕生	106
Gを継ぐもの	108
黒いガンダム	110
The 1st Introduction of RX-78-2, MS-06F1	111
Weapons of RX-78	112
「ガンダム」の誕生と発展	113
MSの進化	114
RX-78-2 ガンダム MS-06F1 誕生の経緯	115
地上に降りたガンダム	116
The 1st Introduction of RX-78-2 試作機	117
Weapons of RX-78-2	118
RX-78-2 試作機、ガンダム、黒いガンダム	119
GUNDAM SIDESTREAM	120
ガンダム 試作機、ガンダム、黒いガンダム	121
ガンダム 試作機、ガンダム、黒いガンダム	122
ガンダムの世紀 特刊 有田	123
ガンダム 試作機、ガンダム、黒いガンダム	124
GUNPLA Revelations — カンプラ 30年の歩み —	125
第2回 Gunplaの歴史と発展	126
GUNPLA FRONT LINE 30th	127
用1 名人のこころんプラモデル 川口 一	128

NAME

Editor 編集  
Writer 著者  
Illustration 挿絵  
Design 装幀  
Special Thanks 特別感謝

最新情報はガンダムオフィシャルズ公式 Web まで  
<http://www.gundamofficials.com/>

Official File Magazine  
ガンダム MS ヒストリカ Vol.2

発行所 大竹永介  
編集者 高田洋  
発行所 株式会社 講談社  
〒112-8601 東京都文京区  
電話 編集部 03-594-1191  
印刷部 03-594-5608  
営業部 03-594-5614

Printed in Japan  
印刷 日本印刷株式会社

ISBN978-4-06-370079-4



源、①の機体を含みよ、②型(右1)の表面は酸素に(物、④W)

Produced by BANDAI KOREA / Developed by SOFTMAX / Published by CJ Internet Japan.

©創通・サンライズ ©創通・サンライズ・毎日放送 CJ  CJインターネットジャパン株式会社 <http://www.sdgo.jp/>



OFFICIAL FILE MAGAZINE

# GUNDAM

## MS HISTORICA



雜誌 60252-55

ISBN978-4-06-370079-4

C9472 ¥657E (0)

定価：本体657円（税別）

講談社



制作・サンライズ